家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第五十七巻　第三号

3

日本幼稚園協会

MITSUI COLOR 総天然色

レコード付人形童話スライド

ビクター長時間（EP）レコード付

—目と耳から楽しめる完全視聴覚教材—

新作発表

☆ペンギンのおやこ
創作童話
語り手　古賀さと子

☆ペーターと狼
ロシア童話
語り手　真弓田一夫他

☆シンデレラ
ペロー童話
語り手　黒柳徹子

—ペーターと狼—

・ブレーメンの音楽隊
・みにくいあひるの子
・ピノッキオ（前後篇）

以上三点レコードなし

東京都中央区日本橋茅場町3ノ14
電話（67）2732　振替東京 80183
三井芸術スライド社

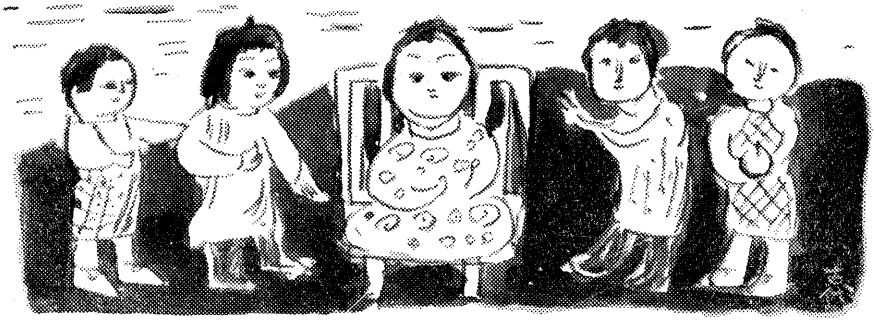
トッパンの人形絵本

かわいい人形を美しい舞台にのせて天然色写真で撮影して作った楽しい人形絵本

★へんぜるとぐれーてる
★ぶれーめんのおんがくたい
★やん坊にん坊とん坊
★三びきのこぶたのたんじょうび　★三びきのくま　★いっすんぼうし　★あかずきんちゃん　★ねむりひめ　★じゃっくと豆の木　★ぴーたーとおおかみ　★きんのがちょう　★しらゆきひめ　★おやゆびひめ　★まっちうりの少女　★ちびくろ・さんぼ

各一〇〇円

東京日本橋茅場町
トッパン



幼児の教育　目次

——第五十七巻　3月号——

表紙　安泰

幼稚園時代の思い出あれこれ……多田鉄雄（2）
会議における二・三の欠陥……水原泰介（6）
私どもは職員会をこのようにもっている……隈元保（10）
職員会というもの……菊田要（12）
職員会をどのようにもっているか……沼館正尾（15）
冬の室内遊びについて……三国洋子（18）
園長が職員にのぞむもの……大崎サチエ（21）
男の教師　歩んだ道と考えていること……舟木哲朗（22）
ふしぎな木の実……村井トミ（26）
施設の改善——施設研究大会に参加して——……清水桔梗（30）
保育の工夫　幼児に与えるお話の工夫……早瀬渥子（34）
ヨーロッパの旅　再びドイツでの生活……平井信義（38）
幼児のボール遊びの教育的意義とその指導法……岡本卓夫（43）
幼児の笑いの表情について……川原田恭子（48）
幼児の質問の扱いについて……吉野美智（50）
倉橋文庫についての報告……（52）
どうでしょう……飯島日出美（58）
園長にのぞむもの……（60）
幼稚園参観記……（61）

編集主幹　及川ふみ　編集主任　津守　真
協力委員　牛島義友　斎藤文雄　多田鉄雄　波多野完治　山下俊郎　（五十音順）

幼稚園時代の思い出あれこれ

多田鉄雄

明治四十三年から足掛け三年が私の幼稚園時代であった。幼稚園は神田駿河台下にあり、小川町へかけて商店街の電車通りをちょっと入ったところ、住宅と店やが入り混った街角で、猫のひたいほどの庭に銀杏の大木が一本門柱とならんで立っており、枝垂柳の木が幾本か板塀にそって立っていたのをおぼえている。その園舎はのちに幼稚園が池袋に移転したあと、創業後ほど経た石川一美氏の主婦之友社が現在の場所に移る前にしばらく社屋にしていたはずである。近所に五十様と呼びならわされたお稲荷があって、五の日、十の日の縁日の夜は相当の人出で、父母に連れられ夕食にそこを見歩く時は、きっと何人かの幼稚園友だちに出会うのであった。ともかくも同じ神田にあった岸辺福雄氏の東洋幼稚園が出来てやや間もない頃である。

T先生のことを今でもはっきりおぼえている。眼も口も大きく、あまり人好きのしない、どちらかと云うと、どぎつい顔であったが、ガラガラしている裡に、情愛の深さが子ども心にも感じとられ、私は大好きであった。その頃は明治三十七八年の日露戦争からだいぶ年月が立っていたけれど、子どもたちの間では、相変らず戦争ごっこが盛んであった。T先生は古新聞を細長く巻いてその先を丸く曲げてひもでゆわえ、サーベルを作ることを教えてくれた。この巻き方が簡単ではなく、つよく巻かないとしっかりしたサーベルが出来上らないので練習が必要だった。また同じ古新聞でカブトのような帽子を折らせ、それをかぶらせた。それで私たちはいっぱし武装した軍人になりきることが出来、「僕は大山大将だ」、「僕は乃木大将だ」、「僕は黒木大将だ」といったわけで、そのサ

ーベルで打ち合うのであった。これは棒切れでやるような危険がないばかりでなく、私たちは打たれる痛みが大したことでないとわかっていたので、手加減などせず、思うぞんぶんに相手の頭でも顔でも腕でも打込むことが出来たから、胸がすいて実に愉快であった。T先生は更に女の子をも動員した。やはり古新聞で看護婦の帽子を折らせ、正面に赤い折紙を切って赤十字に貼ったものをかぶらせた。すると私たち男の子は、しばらく打ち合うと床板の上に負傷した気持になってわざと倒れる。女の子が二三人、組になって頭と脚をかかえて負傷者を片隅に運ぶのである。そして医者になり看護婦になって手当し介抱してくれる。男の子は男の子でこうして小憩をとり、またサーベルを作り直しなどして出陣する。T先生はすべてがフェアにおこなわれるように見守りながら、楽しそうに、しかも総指揮官然として立っているのであった。私たちは何度もこの遊びをT先生にせがんだものである。この遊びがT先生の創意であったかどうかは、勿論私は知らない。しかし戦争ごっこそのものの可否は別として、この古新聞を利用した安全な遊び、そして幼児の闘争心と云うか、打ち合いたい衝動と云うか、そうしたものをフェアな形で発散させる遊び、更に女の子にもそれなりにじゅうぶんの役割を与えている遊びを展開させたT先生に私は今も敬意を持つのである。

人は思いがけないことで、また全く思いもよらずに他人の心をきずつけることがあるものである。私の記憶では幼稚園時代に思うぞんぶんにふるまったおぼえはあるが、友だちをいじめようとした気持は更になかったと思っている。現在某音楽大学のピアノ科の教授をしておられるO氏は私と同年輩であり、数十年来の友人であるが、私の中学時代の友人の紹介でO氏と知り合ってしばらくのち、たまたまお互に幼稚園時代の思い出話になったことがある。話してみると私と同じ幼稚園出身である。とすれば年令が同じだから当然二人は一しょに幼稚園に通っていたはずである。ところがO氏は一年足らずで幼稚園を休み勝ちになり、小学校へ入る直前の頃はすっかり幼稚園へ行かなくなってしまったそうである。その理由はと聞くと、O氏をいじめる子どもがいて幼稚園に行くのが嫌になったと云う。私は当時を思い出して、いわゆるボスだった数人の子どもの名をあげて、O氏をいじめたのはこれこれのものかとたずねたところ、O氏は、「そうではない、僕をいじめた子はこう云う名前だった」、と云う。それは私の呼び名であって、その当時、私以外にその呼び名をもった子はいなかったから、まさにO氏をいじめて幼稚園をやめさせ

たのは私にほかならなかったわけである。私はたしかにボスの一人であったかも知れなかったが、まさかと思っていた。私はやや赤面しながら、それでどんないじめ方をしたのかと聞くと、一番よくおぼえているのは「お前のお弁当のおかずを見せろ」と強制されたりしたことだと云うのである。思い当った。私はほんとに友だちのお弁当に関心をもっていたのである。それというのが、私の住居は幼稚園に隣していたから昼食をたべに家へ帰るように命ぜられていた。そんなわけで私はいつもお弁当をもってくる他の子どもたちが羨しかったのである。それでおそらくほかの子どもたちのお弁当が見たかったにちがいない。このO氏との出来ごと、当時のO氏の心理、私の心理、私の行動は、幼児の教育を考える私に今にいろいろの示唆を与えてくれている。

Sという女の子は眼のパッチリした頬の赤いとても可愛い子どもであった。私は好きで好きでたまらなかった。いつの頃からそうした愛情が深まっていったのかはおぼえていないが、いつとはなしにSも私のそばをはなれなくなり、何のあそびもいつも一しょにいて、たとえば先に述べた戦争ごっこの時など、Sは必ず私のところの看護婦長だった。だから保育室で、席の入れ換えが命ぜられて、二人が離れ離れにされるときなど先生が恨めしく思われるほどであった。いよいよ幼稚園の卒業式も迫ってきて、Sは私とちがってお茶の水の小学校へ行くことになったので、学校がちがえば一しょに遊ぶこともだんだん出来なくなると思うと、何か不安でたまらなかった。学校へ通うようになってからも、きっと遊んでくれるように何度か約束した。それでも心配で、あれこれと心をいためた末、ある日、思い切って部屋の隅に呼び込み、誰もそばにいないのを見とどけてから「君大きくなったら僕のお嫁さんになってくれる?」と聞いて見た。Sは真顔でうなづいてくれた。それから数日間は鬼の首でもとったようで、嬉しくて随分はしゃいでいたのを今でもおぼえている。小学校にあがってからも一日おきぐらいに二人は一しょに遊んだ。そしてまた遊ぶゲンマンをして別れるのであった。ある日Sが妹をつれて来たので、私は「邪魔だから帰しなさい」と云って帰させたことがあった。ミソッカスが足手まといになるということのほかに、私はたしかにSを独占してその妹からも離しておきたい気持が仂いていたようである。しばらくしてまた妹を連れて来た日があった。Sは「お母さんが妹も一しょに遊んでやりなさいと云うので」と云って、私がまた連れて来たことをなじっても、今度は妹を帰そうとはしなかった。私は怒って「それじゃ、もう遊ばない」と云ってしま

った。Sは悄然と妹の手を引いて帰って行った。意地と悔恨が交互に私の胸を支配した。四五日して私は思いきってSの家へ誘いに出掛けた。ところがSは学校に何か催しがあってまだ帰宅していないとのことであった。Sの方からはその後ついに誘いに来なかった。私も「もう遊ばない」と云ってしまったことばが頭にこびりついていて、二度と誘いに行く勇気が出なかった。一年たってしまい、二年たってしまい、Sのことをほとんど忘れてしまっていた三年目のある日、道でばったり行き会った。Sはにっこり笑って会釈したが、Sも私もおとなになっていたようで、とりすましたまま別れてしまった。私が中学一年のとき、Sが学校の帰りらしく、電車通りの向う側を一人で歩いて来るのを、私は友だちと一しょに歩きながら遠くから見つけたが、そのままだった。それから数年して、Sが急性肺炎か何かで死んで行ったことを人づてに知った。Sは私が「もう遊ばない」と云ったことなど、もう怒ってもいなかったろうし、私のことなど忘れてしまっていたのかもしれない。けれども私は謝罪して和解する機会を永久に失ってしまったことが悔いられた。今でも園児の中で特に仲よしの男女がむつまじく遊んでいる場面に出会ったりすると、おのずとほほえまれながらも、Sのことが思い浮ばれてきて、ほのかな何かが心に触れてくるのである。

たしか小学校へ入る前の年のことだと思う。家の勝手口に物乞いの老婆が立って「何かめぐんでやって下さい」とていねいに頭を下げているのであった。私はそのあわれな姿を見ているうちに何か自分まで悲しいような気持になって、家の者に頼んで握り飯を一つ作ってもらい、その老婆に手渡しした。すると老婆は「どうもありがとうございます。坊ちゃん、きっといつか神様があなたを助けて下さいますよ」と云うのであった。そして私はほんとに老婆に云われたように、いつか神様が私を助けてくれる時が来るような気がしたものである。その記憶が妙に消えないで時折思い起される。私は考える。特に同情深く生れついているわけではない私が、あの時どうしてあのような気持になったのであろうかと。私は兄弟姉妹が多かったので、その頃祖母の部屋で祖母と寝起きしていた。そして祖母は信心家であったが、寝物語りに、よく不幸な人の話、運のわるい人の話を私に聞かせてくれたことである。それが私にこの気持——私は惻隠の情の芽生えと見るが——を培ったのではないかと思う。あるいは幼稚園の教育の結果であったろうか。正直のところ私にはわからないままでいるのであるが、それにつけても今やかましい論議の道徳教育のことに、信仰の問題とからみ合って、考えが移っていくのである。

会議における二・三の欠陥

水原泰介

若い先生がたに、「先生のところの職員会議はどんな具合ですか」とたずねてみますと、「別に変ったことはありませんが、退屈なことが多いですね」というような返事が少なくありません。「窮屈です」と答えられる先生もあります。

ところで、これらの先生個々人は教育に理想をもち、教室や遊び場では熱心に努力し、教育効果を上げている人が少なくないのです。それなのに、先生たち皆で一しょに考える職員会議の席につくと、あまり生産的でなくなるのです。それでは今度は園長先生に質問してみましょう。お答えはたいていきまったように「私は若い先生がたの気持や考えを尊重して、職員会議をできるだけ民主的に運営するように努力しています」——ということです。

民主的精神をもたれた園長先生のもとに教育熱心の若い先生がたが集まって職員会議を開いているのに、なぜ効果的生産的な会議が実現しないのでしょうか。これにはいろいろの原因が考えられます。しかしそれらの原因を一つ一つ挙げて、それへの対策を考えるというようなことは許された紙数ではむずかしいので、本稿では、その中の一、二だけをとり上げて考えてみたいと思います。

一部の特定の人だけが多く発言して、他の人はおとなしく聞いているというような会議をしばしば見受けます。これはあまりよいことではありません。一部の人しか発言しないのでは、全員の

意思が討議に反映されるということが出来にくいのです。豊富な知識、卓抜な意見、すぐれた思考力をもった人々が集っていても、発言をしないでいたのでは、集団の問題解決には全然役に立ちません。

私たちは話し合いに加わり、自分の考えを述べる機会をもつと、その討議の成りゆきに強い関心をもつようになります。自分が発言した内容に関係のある議論がおこなわれると、その討議に無関心ではいられなくなります。したがって、多くの人々に発言させるようにすれば、それだけ多くの人々が討議の内容に関心をもつようになります。

会議がすんでから、会議で決ったことに文句を言うのは、会議の時じゅうぶん発言しなかった人が多いようです。そんな結論には責任が持てないと云って、会議で決めたことを実行しないのもこの人たちです。

私たちは、自分の考えを他の人に聞いてもらい、それが偏っていたり、誤っていたりしたらそれを指摘してもらいます。自分の考えが正しい偏らないものであれば賛成してもらいます。つまり、自分の考えをテストしてみるのです。——これによって、自分の考えの欠陥に気づき、あるいは、自分の考えが正しいことが一層明確になります。このことは私たちの精神的成長に非常に役立ちます。発言をしない人は自分の考えをテストしてみることはできません。

発言の少ない原因はいろいろあります。その一つは討議すべき問題がはっきりしないことです。問題が抽象的であったり、あるいは、問題が広範囲にわたっていてどんな発言をすればよいのかわからない場合があります。このような場合には、発言を躊躇します。問題をできるだけ具体的に示し、身近かなことに関係づけて提示することが望ましいのです。

問題がはっきりしても、その問題に関心がもてない場合には、やはり発言が少なくなります。問題に関心をもたせるためには、問題を提出する人は、「なぜそれを問題にするのか」「その問題はメンバーたちにとってどんな意味をもっているのか」などをはっきりさせることが望ましいのです。また、その問題が会議でとりあげる価値や必要があるかどうかを皆で相談してみるようにすることも、討議に関心をもたせるのに役立ちます。

雰囲気も大切です。発言しやすい雰囲気を作りだすことに成功しなければ、会議はうまくゆきません。雰囲気作りには特に司会者の言動が重要な役割をもっています。司会者は形式ばらないで、ごくくつろいで、ユーモアを混じえながら会を進めてゆくようにすることが大切です。もう一つ大切なことは、人の言うことによ

く耳を傾けることです。相手の云ったことに対する尚早な批判、評価は禁物です。相手が云おうとしていることをじゅうぶん理解しないで早呑みこみして、「それは今の問題とは関係がない。」「それには反対だ。こうすべきだ。」――といったようなことを述べる人をしばしば見かけます。こんなことを云われると、自分の意見が尊重されているとは決して思えません。したがって、意見を述べる気がしなくなります。このような尚早な批判、評価は雰囲気を悪くします。

よく聞いて相手の言うことを理解し、その後にはじめて相手の主張に対して批判や評価をおこなうようにします。理解をじゅうぶんならしめるには、相手の云うことを理解できたかどうかをテストしてみることが役に立ちます。これは、相手が言ったことをもう一度自分のことばで言い直して「あなたは……とおっしゃるのですね」と尋ねてみるのです。これに答えて、相手がそうだと云えば、相手の云ったことが間違いなく理解できたことがはっきりします。そこではじめて、相手の主張への批判や自分の云いたい主張を述べます。こうすれば相手は、「他の人が自分をじゅうぶん理解してくれた」と感じ、他の人からの批判や反対も素直に受け入れることができます。

以上では、一部の特定の人だけではなく全員が積極的に発言するようになることについて述べましたが、多くの人が発言するようになったというだけでは、必ずしも優れた会議にはならないでしょう。これに加えて、これらの発言を会議の中に生かしてゆくことが必要です。お互の考えを会議の中で生かし、会議の成果を高めるためには、お互の考えを理解し合うだけでなく、それぞれの考えの間の関係づけをおこなうことが必要です。会議では一つの問題（共通の問題）を皆でいっしょに考えるのです。したがって、その問題について参加者の考えを集め、それらを互に関係づけることが必要です。

会議の中で、それまでに出された意見との関係がはっきりしないような発言が出て来ることはまれではありません。このような場合に、その関係を明らかにするような陳述が加えられれば、その発言のもつ意義がいっそう明瞭になり、それまでに出されている、いろいろの考えが統合されてきます。「関係づけの発言」によって、それぞれの考えが会議全体の中に生かされることになるのです。また、このような「関係づけ」への配慮が欠けていることが、多くの会議を、単なる思いつきが次から次へとならべられ、知らず知らずの間に問題点が浮動してゆく雑談的なものにしてしまっているのです。

尚早な批判、評価を慎しむべきであることは上に述べた通りで

すが、これに関連して、次のような態度も警戒しなければなりません。

一つの問題についていくつかの異った解決や考えかたが存在することに対して寛容な態度をとることができない人びとをしばしば見かけます。この人たちは、「自分の意見が正しい」のかあるいは「相手の意見が正しい」のか、どちらか一つに直ぐに決めてしまわなければ気がすまないのです。しかし、「自分の意見」「相手の意見」のいずれでもない、これらとは異なった考えが最も優れた解答であるかもしれないのです。このように二つの中のどちらかだと（二者択一的に）決めてかかる態度は、自分の意見とも相手の意見とも異った第三の考え、新しい解決を、追求することをさまたげ、問題のよりよい解決を見出すさまたげとなります。

また、じゅうぶん考えもしないで、すぐ相手に賛成したり、あるいは自分の主張をあっけなく引込めてしまったりする人がいます。こういう人は、より優れた解決を追求することを忘れているのです。「うかつに自分の意見を主張して他の人から反対されるのはいやだ、簡単に賛成して無難に過そう」という態度、あるいは「どうでもいいから早く終ってくれ」という態度なのです。私たちの討議では、自説を固執して譲らないか、あるいはあっけなく自説を撤回するという両極端が多過ぎます。皆で一しょに考えて、主張すべきところは主張し、譲るべきところは譲って、問題解決本位に振舞うという態度が欠けているように思われるのです。

もう一つ触れておきたいことは、私たちの討議では批判的な意見は多いのに、その割には建設的意見は少ないということです。「あなたの意見はここが誤ってやしないか」「これでは工合が悪いのではないか」など批判的な発言がたくさん出されます。しかし、工合が悪ければそれをどうすればよいのだという建設的な意見はあまり出ないのです。批判のしっぱなしな人です。建設的な意見が出ないということも、優れた解決を皆で追述しようという態度が乏しいところに起るのです。（お茶の水女子大学助教授）

＊　＊　＊　＊　＊

私どもは職員会をこのようにもっている

隈　元　保

一　その形式

私どもの幼稚園は私の他に、女の先生が三名いるから都合四名ということになる。幼稚園は一般に規模が小さいから、園長以下職員数が十名以内といったところが大多数であろう。学校や大きな幼稚園ともなれば、校長（園長）や教頭（主任）が座長とならないで、議長（もしくは議長団）を教官の中から選出し、その議長（もしくは議長団）によって、民主的に職員会が運営されているところも多いだろう。

しかし私どもの幼稚園ではその形をとらずに、民主的雰囲気を失わないように心がけながら、私が座長になって議事をすすめている。

僅か四人の職員会であっても、司会者は園長や主任でない方が形は整っているかもしれない。しかし形式だけ民主化されても、実体や内容がそれに伴わなければ、民主的な職員会の名に価しないし、形式よりも会の質的内容が高まることが大切だと考えて、そんな形をとっている。

僅か四名のメムバーだから、いつでも都合のよい時に、あるいは必要に迫られたときに随時開いても別に支障はない。また改まって職員会と名づけて、集らなくても連絡や相談はできる体制にはあるわけだが、私どもは毎週火曜日の午後、正式に職員会という名を使って会同している。それはくだけた日常の話し合いを無意味なものとして、職員会といういかめしい会議の形式を尊重するためではない。また職員会の決議に権威をもたせ、各自の自由を拘束するためでもない。毎週火曜日ときめて置く方が、園長も先生方もそれぞれの計画に従って、研究や環境整理や、保育に専念できるからである。先生方が明日の保育のための準備をしている最中に、突然集まって下さいというようなことはなるべく避けた方がよい。

二　その内容

職員会で問題にする内容はかなり広範囲にわたっている。これだけは職員会にかけるが、他のものはかける必要はないというような規則や申合せはないから、自由にどんな問題でも気楽に話し合うことにしてい

る。

多くの幼稚園の職員会で相談されている内容と、そんなに違っているとは思わないが、私どもの幼稚園でも、行事の日程やその計画、施設設備についての改善や補修に関することなどはもちろん、教育計画の検討から、保育者として当面している具体的問題などとあらゆる話題を提供している。またPTA役員会での話し合い（私のところのPTA役員会には私と主任が出席することになっている）なども報告しあっている。

結論的にいえば、幼稚園の経営面、教育面、研究面にわたる問題を大小となく提出し合い、話し合っているということになろう。ただ人事にわたる問題は別にしている。人事問題（主に新規採用の場合であるが）については個人的に意見を聞くことはあっても、それはあくまで園長の参考にする程度で職員会でとりきめることはない。私の大学では人事問題については別の機関もあるから、これだけが例外となっている。

このように職員会が単に事務処理上の連絡ということでなく、教育研究上の問題にまで触れるので、私ども四名だけでは確信のもてる結論に達しない場合もあり得るわけである。研究に価する子どもの性格判断や、ケーススタデーの進め方など、簡単に結論が出ないような場合、結論を保留してさらに研究を続けることにしている。場合によっては専門家の意見を求めることがあるが、幸い私のところは大学の付属で専門家を求めることの便には恵まれている。適当な歌の選択など、付属小学校との協同研究で問題を解決することもおこなっている。

このように職員会で問題にする内容の中には、研究会的性格も多分にもっているが、私は形式的な事務連絡や、園長の意図を伝達するだけの会議よりはこんな行き方の方がはるかによいと思っている。

その他研究発表会や、運動会や遊戯会などについての反省だけを主にした職員会ももっている。会議に中心の議題がなく、徒らに枝葉末節に走り、散漫に流れて時間の浪費に終ることは避けねばならない。能率的な会のもち方ももちろん大切であるが、機械的に、独断的な結論を急ぐこともまた危険である。私どもの幼稚園ではよく宿題研究ということにして、私自身も先生方も次回まで考えてくることにする場合も少なくない。

三　それへの願い

小規模の職員会が成功する場合と、失敗する場合の条件は極端に対象的である。

少人数の会議では、各自の意見がじゅうぶん述べられ、討議が徹底的におこなわれる利便があるから、そんな会議は成功するだろう。

しかし少人数ということはまた同時に危険性ももっている。じゅうぶん話し合いがなされずに、上席者の意志が押しつけ的にされやすいということが予想できるからである。園長や主任の意見に反対であっても、職員会が民主的雰囲気に乏しい場合、その反対意見が率直に述べられないとなれ

ば、名は職員会でも実際は承るだけの会合に終ってしまう。少人数の会議が失敗するのは、気軽に発言のでき難い場合、管理者の権威が必要以上に支配する場合だと考えてよいだろう。

殊に幼稚園の場合には、先生方はほとんど女性であって、その上園長との間に相当の年令的開きがある場合が多い。それとともに中間の年令層が比較的少ないということも、幼稚園の職員組織が不安定であるとされているところである。職員会が上からの伝達会に終ってしまわないような対策が講ぜられねばならない。

対策は会議の形式や、その席上からはうまれないだろう。園長と職員との間の、あるいは職員同志の人間関係が、民主的であることが先決であって、自由な雰囲気が平素から養われていなくてはならない。

職員会に出る一人ひとりの問題意識が、子どもたちへの合理的な保育という一点に帰一するとき、会議は教育的格調の高いものとなるであろう。

職員会でのことばづかいはなごやかでも、その話し合いされている内容は、子どもたちの倖せに通ずる保育の合理化への問題となるであろう。

もちろん園長は、先生方を指導すべき立場にある。しかし指導意識を出し過ぎると会議でなくて指導会になってしまうだろう。また先生方は保育についての抱負と問題をもっているし、合理的な保育の実践が促進されるような研究と課題とを持っているから、一人ひとりが人間的信頼感をもってその考えを気軽に発言したい、考え合い、実り豊かな結果が得られるような職員会であるように力めているわけである。

（愛知学芸大学付属幼稚園長）

職員会というもの

菊田　要

職員会と漠然とよんでいるが、日により時によっていろいろなスタイルで運営される。

一つは伝達の機会であることで、教育委員会、文部省等からの通達を伝えることをする。日教組との斗争期などによくおこ

なわれる。これは大体校長・園長から一方的にされる訓辞めいたものだから、受ける方はひどくつまらぬものらしい。

もう一つは学校運営上の諸問題について話しあうもので、これは直接的で具体的だから活潑な形になる。行事計画、ＰＴＡのこと、生活指導についてなどの話しあいがこれにあたる。いちばん多いものであろう。

さらに研究のための会がある。これには教師自身の勉強になるものと、教育の方法的な研究の会とがあろう。これが最も大切なものだが、この形の会はわりあい少ないような気がする。

もともと教育という仕事は、対象とするこどもも、こどもをとりまく社会環境も日に日に変転していくものであるから、いつでも研究して適応するように努めていくのがあたりまえである。昨年の一年保育のこどもと、今年のそれとは大きくちがってきている。ことに人工衛星がうちあげられた今日、その以前と以後では考え方の尺度をかえていかねばなるまい。

だから、研究の仕事は、淡々として日常茶飯事として続けていくべきであろう。研究というとなにか研究発表会だけをめあてにして、緊張しきったギリギリの態度で夜おそくまでプリントし、職員は健康をそこね、こどもは過重な負担に興味を失ってむしろいや気がさしてしまうようなやり方を思い浮かべる。これは日本人の悪い一面である悲壮感を求めたやや自虐的症状のように思われる。そして結果として残るのは、その後省みられなくなった部厚いプリントであり、疲労から来る空しい虚脱感であるというようなことになってしまう。これではまことに困るし、一体誰のための研究かと尋ねたくなる。研究されたものがムダなく役にたってその後の教育にいきいきと生かされなくてはまったく意味がないと思う。

研究は楽しく進めたいものである。教師としての自覚に立って生きがいを感じながら、重圧にならず、痩せもせず、研究の内容に深い興味をもって進めていきたい。毎日のことなのだから、負担になりすぎてノイローゼに陥ることなく、正常な形でありたいと思う。わたしの幼稚園でいま「劇あそび」を中心に研究しているが、そのいき方でやっている。なにかこれまで保育についてのハッキリした目標をつかめなかったのが、からだで明確にうけとめたような気がして、はりあいを感じている。さいわい健康の方も上々でむしろふとって来たことを嘆いている人さえある。これは精神的に安定して来たせいと思われる。

そんなことからか、最近職員室でこどもの具体的な事例についての話しあいがよくきかれるようになった。これもたいへん大切なことで、本を読むことより効果が直接的である。それにはこどものなまな生活をみつめなければ出てこないもので、こどもの現実の姿を正しくつかまえようとする姿勢が確立される。これこそ教育の出発であり、第一の条件であると思う。

職員室をつつむふん囲気が、すなわち教

室をつつむふん囲気となってあらわれる。

職員室が民主的で、おたがいの理解と信頼の上になり立つていて、誰もが気がねなしに安心してデスカッションしたり話しあつたりできるようでありたい。そうすれば単なる事務を片づける場所でなくなり、人生を深めていく真理を探求する場にもなろう。ほとんどわれわれの大半の生活を過す学校が、明かるく楽しくなかったら大きな不幸である。教育という仕事が人間対人間の仕事であるだけに、職場のみんなが有機的に給びつけられ、安定した心構えで当らなければ効果のあがるはずがない。まず職員室が民主的自主的なふん囲気を持ち、それを教室にまで生かしていくようにしたいものである。

近ごろはそんなことないが、以前にはよくこれに対する学校側の意見はどうなのであるかときかれたものだ。わたしは学校側の意見というものはいまここで諸君と話しあってきめることを指すのではないか、みんなが自分の学校のことだという見覚をもって、責任を感じてもらわないと本当の仕事ができないと思う。われわれには何かといえば上司に伺いを立て、自分のことを他人に判断してもらうようなわるいくせがある。長上の指示を仰ぐといえば体裁がいいが、案外裏がえすとエゴに基づく場合がある。つまり自分の責任をできるだけ少なくし、いざというときには逃げる口実を作ろうということもないとはいえない。書類にハンコをいくつもおすことなどもその一例かもしれない。責任は反比例して軽くなっていくとも考えられるから。しかしこの考え方が自主性をおしつぶしていることはたしかである。学校の問題をひとりひとりの教師が、自分のことにうけとめて、じゅうぶんに責任を感じ、方法も考えていくような職員会運営が大切なことだと思う。

それには——話が逆戻りするが、職員室のふん囲気の問題にかかる。人心の交流がスムースにおこなわれていなければどうにもならない。

わたしのところではふたつのユニークな方法をもっている。ひとつは職員のお誕生会で、ひとつは職員会の始めと終りにする合唱である。

お誕生会は始めてから約二年になる。毎月それぞれの当番学年が独創的な案を立ててプログラムを組む。もともと月一回ぐらいはしちめんどうくさいものをぶっとばしてゲラゲラと大笑いしようという目的だからなかなおもしろいことになる。六年のほかに専科グループと幼稚園とが加わるから、八組で交代に運営していく。その月の誕生者は正面に大きな花飾をつけて着席するのが定石だ。そして幼きころの思い出の一節を話してもらう。これが案外心にしむ話になって、その人柄が現われ、人間としての親近感がわいてくる。それが済んでからはその時によってちがう。クイズあり、室内ゲームあり、フォークダンスあり、合唱あり、いやどうもすさまじいものである。わずか五十円位の会費で、グラス半分の葡萄酒をのみせんべいをかじるだけでも、好もしい愉しいふん囲気が出て、おなかを

抱えて笑い通しである。ひげをはやした大の男が、まことにつまらぬゲームを真剣に競い、チームの得点にハラハラする姿も実にほほえましい。これはその場に列席しふん囲気にひたらないと、どうも筆舌に現わし難いというところである。

職員会始めと終りのうたごえ運動もいいものである。それぞれの教室でめいめいの仕事をしていた教師が、気持を整えて話し合いに入っていける。また烈しくデスカッションしたり、意見を主張しあったあと、一しょに声を揃えてうたうのはまことによいものである。感情的なこだわりをサラリと流し、しこりをもみほごすことにもなろう。うたい終って相手でピリオドをうつ職員会は近代的な感じがする。意見の対立は、協議することがらについてであって、決して個人的なものでなくしていくためにも役立っていると思う。またそういう状態であってこそ、思い切って自分の案を主張できるし、真剣に学校の問題を考えていくような心構えになっていく。

要は、平凡のようだがみんながたがいに信じあって、こどもの倖せのため一しょう県命に協力しあっていこうとする私の精神を第一にすることにほかならない。そのことがPTAとの連絡を密にし、理解ある支持を受けることにもなろう。しかしいずれにしろ、このことについて校長・園長の果たす役割は、たいへん重要なものであることを知らねばならない。

（台東区立富士幼稚園長）

職員会をどのようにもっているか

沼館　正尾

私の幼稚園では、毎月、月初めに、各組ともその月の保育案を持ちよって、年度計画と照し合せ種々の問題を討議しております。

年長組は年長組で連絡をとり、年少組は年少組として連絡して各々の案をきめていきます。

このような職員会は、どこの幼稚園でも大体同じことと存じますが、私のところでは、ちょっと変りまして、「一息職員会」ともいうべき話し合いの会を毎日開いております。

子どもを送り返した後、先生がたが一息つくときに、当番の先生がお茶を用意してくださいます。時にはお菓子も添えて……。

その時にその日の出来事、子どもたちのありかたについて、幼稚園全体の問題について、気づいたことなどをどの先生からともなく話題を出して話合うことになっています。

これはとくに命題のない職員会であって、時間の制限もなく、毎日の保育の上に先生がたの協力と連絡を保ち、幼稚園全体が一体となって保育してゆく為に必要なことであると考えて、多年の間実行してまいりました。

時には時間を忘れて問題の討議に日のくれることもありますが、大体一時間前後で話合いが終りまして各自の仕事に移ります。

この一息職員会が、どんなに先生がたの反省と勉強になるか——しかも和やかな気分の中に研究が出来て、それが先生がたの身につく点では、形式的な職員会よりはるかに有効だと考えております。

これは各クラスの先生がたが、自分のクラスを見るだけではなく、各クラスの子どものもつ特長なり欠点なりを知っていただいて、庭に出ている場合にも、お互に他のクラスの子どもにも注意を払ってゆくこと、その日起きた事柄をこの会で話合って問題を解決する横の連絡をとる為にも役立っています。

二、三の列を挙げて見ますと「この頃私の組では靴をかくすのが流行っております。調べて見るとA君らしいですがまだはっきりしないで困っています」という先生がありますと、「ではA君を皆で気をつけて見ましょう」ということになって、すぐに解決できました。

また、「このごろ規定外の大きなクレヨンをもってくるのが多く、他の子どもが羨しそうにして見ておりますが……」といえば「私の組でも多くなってきましたが、どうにかしなくては……」というような話から、早速プリントして家庭へ連絡して解決します。

またあるときは「皆がだいぶできるようになったので、今日私の組で攀登棒を全部にやらせてみましたが、あい変らず運動神経の鈍いY君だけはやって見ようともしませんでした。

来年小学校なのでどうかして多少運動をさせようといろいろやってみるんですが、いつのまにかそのグループからぬけてしまいます」というと、他の先生から「でもこの間、女の子の仲間でまりをなげていましたよ」という話が出て「そうですか、珍しいことです。では、そんなことからはじめさせましょう」となって、その後運動神経の点では特殊児童ともいってよいY君の指導について種々討議しました。

あるときは「私のところのH子さんが、全然お話しができません。おえかきのときでも他の場合でも、出来るだけ話しかけてみるのですが、首を縦にふるか、横にふるぐらいがようやくなんです」という話が出ますと「では、H子ちゃんを見たら、みん

なでなにかしら話しかけて見ましょう」ということになって、先生がたに注意していただいたおかげで、H子さんは割合に短い期間で、声こそ小さいけれどもどうやらお話ができるようになりました。

またある若い先生が困ったように「M君は家庭でもよくゆきとどいているし、頭も悪くないのですが、何かしら不安定で、人のいないような所へおとなしそうな女の子を誘っていったりして、遊びが不明朗なので注意すると、悪そうな顔をするのがおとなのようで心配になるんですが……」というお話を出しましたので、皆さんに気をつけていただくようにしました。ところが、見ていると物置のかげとか、先生の目のとどかないような場所へいくのが多く、何をしているかときくと「お医者ごっこをしている」というのです。こんな場合に先生は平静に軽く注意してとくに悪いことをしているというような意識をもたせないようにして自然に明るい遊びの方へ向けていくように相談して、先生がたの協力で正常な遊びへ誘っていただいて、ようやくその子もみんなと子どもらしく遊ぶようになりました。

また「今日は先生のクラスで実物をおいて果物の切り紙をしていましたね。あの梨やぶどうを明日私の方へかして下さい」

時にはこんな経済的なお話も出ます。

こうかいて見ますと、毎日どこの幼稚園でも起るさ細なことで、見逃したり、注意しなければそのまま過ぎてゆくようなこともあります。けれども、とり上げて話し合ってみると、なかなか教育上大切なことがありまして、それから改めて家庭事情を調べてみるとか、家庭訪問をしてみるとか、また身体検査を精密にしてみなければならないようなことや、子どもの往復の道路を歩いてみる必要のあることなどが起ってきます。

この一息職員会が、どんなに先生がたの明日の保育への原動力となることか。また協力的に何事もしていただけるので大切にしています。

ただ、このような会は、長い間には単なる茶呑話になり、惰性でつづいてゆく危険がないとはいえません。しかしそれは当事者の心がまえと教育に対する熱意とによってきまるものと思います。幸い、私の幼稚園では強い反省会ともなって、時間的に多少の負担とはなりますけれども、先生がたの御協力によって大切につづけていくつもりです。

（洗足学園幼稚園長）

* * *

* * *

冬の室内遊びについて

三国洋子

函館市は北海道の最南端ですが、それでも十一月になるともう雪が降りはじめますし、三・四月は雪融けで戸外遊びがほとんど出来ない状態です。冬期間を通じて雪遊びが出来るのは、一・二月の雪晴れの日だけに限られてしまいます。こうした地域性から、必然的に室内遊びが重視されてまいります。

音を立てて燃えるストーヴを囲みながら、楽しい室内遊びに刻の移るのを忘れる子どもたち。窓外の吹雪をよそに、子どもたちは明るく話し合い、歌って笑って、春の芽吹きを待ちわびます。

北海道人の忍耐強さがよく言われますけれど、子どもたちの生活の中にも早くから培われることなのかもしれません。

室内遊びと言っても、さまざまありましょう。保育内容によって次のように分類することも考えられます。言語を主としたもの、社会を主としたもの、音楽・リズムを主としたもの、健康を主としたもの、絵画を主としたものなどです。他に伝承あそびのようなものも数えられるでしょう。

私どもの園では、第三期は園生活の総仕上げと考えておりますので、保育全般を綜合的なもの、協同的なものへ高めていくようにしております。室内遊びもその意味で選択、工夫しておりますが、その中からいくつかをとり上げてみましょう。

とくに目新しいものはありませんが、幾分でも参考になれば幸です。

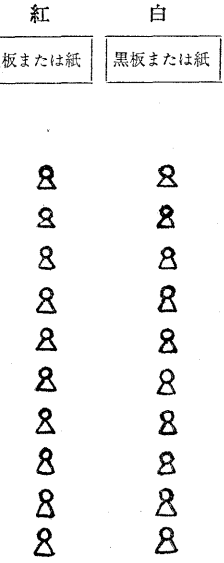
①お話作り

これは全員で一つのお話を作る遊びです。はじめ先生がきっかけを作ってひとりの子どもに渡すと、次々にお話を作り足していきます。どの子も楽しく参加出来るよう短かい一節でも大切に取りあげる空気が大切です。慣れてしまうと、きっかけを渡す必要もなく、子どもたちの手でスムースにお話が進展していきます。思いがけない筋の発展に、子どもたちは期待し、想像し、手を拍って大喜びです。年長組の場合はさらに発展して、全員の手で紙芝居作りとなり、微笑ましい上演にまでなること

も多いようです。
昨年はクリスマスや豆まき、ひなまつりのときなどに面白いお話や紙芝居が出来、お母様がたに発表して喜んでいただきました。生活感情の豊かさや、表現能力を培うためにも楽しい遊びの一つにしております。

②絵かきあそび

これは紅白対抗のあそびです。
黒板やチョーク（大判の紙とマジックインキでもよいでしょう）を用意します。
次に図のように子どもたちを坐らせます。（やり方によっては子どもたちの普段の座席のままでも出来ます）



はじめにテーマを決めます。
例えば「街の中」「動物園」のように。紅白二組から一人ずつ、順に黒板（又は紙）へ行ってひとつだけ絵をかいてきます。順に全員が描き終るまで続けます。人数の少ないときは大きな一つの絵を部分部分だけ描いていって完成させる方法もありますが、「街の中」のように、自動車を描いてくる子、人を描いてくる子、家を描いてくる子、なかには電車のレールだけ描いてくる子、と思い思いの方が面白く、子どもたちも楽しんでします。早く描き終った方が勝というばかりではなく、出来上った絵の評価も全員でするようにしたらよいと思います。
急いで乱暴にならないよう、走らないで行くよう注意させましょう。
チョーク（またはマジックインキ）はバトン代りにします。

③汽車鬼

これもよくやる遊びだと思いますが、遊戯室で元気一ぱい走り廻るのにはよい遊びです。
はじめ五人一組で汽車になります。
先頭の子が機関車です。ピアノが鳴っている間は走り、止むと停止してしゃがむことを、あらかじめ約束しておきます。
汽車はピアノの曲に合せて、各々注意の方向に向って走りますが、このとき、他の汽車とぶつかったら、停って機関車同志ジャンケンをするのです。負けた方の機関車は勝った方の汽車の一番背後につきます。そうしてまたすぐ走り出すのです。幾度か繰り返すうちに長い汽車と、短い汽車が出来ます。中には消えてしまうのもあるかもしれません。
非常に喜び、歓声を挙げてぶつかりたがりますので、乱暴にぶつからないよう、よく注意させることが必要です。
適当なときに休ませて、全員で数を数えたり、比較させてみま

しょう。

④遊具を使用した遊び

これも遊ぎ室でする遊びです。

遊ぎ室にあるさまざまな遊具、例えば、滑り台、平均台、マット、箱積木、攀登棒、ボール、くぐり輪などを、子どもたちが順に回れるように、広く配置しておきます。次に子どもたちを幾つかのグループに分けて一列に並ばせ、遊具別に、反複使用させます。その間ピアノで一定の曲を流し、曲想の変化でグループを交換するようにします。遊具の使用順序をあらかじめ約束しておきますと、スムースに次の遊具へ進むことが出来ます。

なれるにしたがって遊具を変えたり、使用方法を複雑にします。

滑り台をボールを抱えて滑り降り、次の子にボールを投げ上げ、その子はまた、ボールを抱えて滑り降りてくる、というようにしたり、いろいろ工夫してみると面白いでしょう。

⑤二十の扉

これはラジオでおなじみのものですが、子どもたちでも容易に出来るように工夫しました。

はじめは動物や物などを描いた絵を十枚ほど用意しておき、一度子どもたちによく見せます。次にその中から一枚だけ抜いて机に伏せるのです。このとき、抜いた絵も、残りの絵も子どもたちから見えないように注意するのは云うまでもありません。そうしておいて、子どもたちの質問を促し、指名して答えます。「それはしっぽがありますか?」「鳴きますか?」という工合に、子どもたちは大喜びで質問します。

積木やそろばんで二十問を数える役は、どの子にも容易に出来ますし、なれてくると司会も子どもの手で出来ます。

絵の当てっこからはじめて、室内のものとか、お話の中の人物などに進めていくことも出来るようになり、二十問以内に当ってしまうことが多いほど、子どもたちの大好きな遊びの一つになっています。

（函館幼稚園）

園長が職員にのぞむもの

大崎サチエ

よい幼稚園にしたいというのぞみは、園長の常にもつ念願である。施設が完備していることもよい幼稚園たる一つの条件であることはいうまでもない。しかし、更によい幼稚園であるための不可欠の重要な条件は、よい教師がそろっていることである。教師と幼児との相互の教育活動が円満におこなわれることによって、はじめて教育効果は期待出来よう。そこで、幼児の幸福な成長のために、園長は、職員に次のようなことをのぞみたい。

㈠常に健康な精神と、からだの持主であるよう努力してほしい。幼稚園の仕事は、真剣に取組めば、相当にエネルギーの消耗する職場である。からだが弱ければ、子どものためのよい援助者とはなり得ない。骨身を惜しんでこまめに動かない不精な教師にならないために、うんと健康であってほしい。

㈡情緒の安定に常に注意してほしい。

喜怒哀楽を、極端にあらわす教師に対して幼児は恐怖心を抱くようになる。幼い子どものちょっとしたいたずらを、すぐに、ひどく怒ったり、ちょっとした失敗を大声で笑ったりするような軽卒さをつつしんで、むしろ幼児のそうした行動の原因を探ぐる冷静さを保持してほしいもの。

㈢マンネリズムにおちいらないで、常に、研究的態度で、幼児の指導にあたってもらいたい。指導法や指導内容を工夫し、研究しようという意欲に燃えながら、日々、新鮮な気持で、子どもに接してもらえたら、子どもらは、さぞ、伸びるだろう。

㈣幼児一人ひとりを大切に公正に取扱っていただきたい。そして、子どもの要求や訴えや疑問に対して優しく親切に、取上げたり、きいたり、応えたりする正しい教育者としての心情を、養ってもらいたい。どの子どもをも、心から愛することの出来る教師になってほしいと思う。利害を越えたこの教育者的愛情こそ、教育の出発点であり、また教育効果の終着点を約束するものである。

㈤職場での職員の和を保つよう、各人が、自己中心性的態度を脱皮してもらいたい。つまり小我を捨て、大我を成就育成してほしい。

ひとりよがりは、民主的職員室の調和を破壊する。助け合い、協力し合い、補い合いながら、共に教育活動を営むとき、その効果は幼児の上に影響が及ぶものである。

㈥常に謙虚な態度で、自己反省、自己批判の出来る教師になってほしい。自己の人格性の確立に、努力することは、とりもなおさず子どもによい教育効果を与える教師の資質の向上を意味する。

以上は園長が職員にのぞむことであるとともに、園長が自分自身にものぞむことでなければならないと思う。(熊本大学付属幼稚園)

歩んだ道と考えていること

男の教師

舟木哲朗

私が幼稚園へ勤めるようになった時、私の友人たちは随分驚いたものでした。

学校に関係のない友人の中には、これを「左遷」とみたむきが多く（前は中学校勤務でした）学校関係の友人の中には、何か私が失敗でもして中学校を「クビ」になり、止むを得ず幼稚園へ飛込んだのではないかと見るむきが多かったようです。

ずっと前、私が小学校に勤めていた頃には、学校に関係のない友人から「なぜ中学校へ勤めないのか」と、よく言われたものでした。世間一般では、小学校の先生より中学校の先生が偉いし、中学校の先生より高等学校の先生が偉いと思われています。多分、大部分の政治家や教育行政当局の人たちも、そう思っているでしょう。それは、現在、教員の給与が「三本建」になっていることからも、じゅうぶん察せられることです。まして、幼稚園の先生ということになると、これは、先生の中では最下等だと思っている人が多いというのが、いつわりのない現状です。こう書くと、読者の中には「そんなバカなことがあるか」と怒られる方があると思います。全く同感です。しかし、世間がそう思っていると言っているのです。私が思っているというのではありません。「医者の中の最下等は小児科医である」と言えば、世間はこれを一笑に付して相手にしないでしょう。しかし、これと全く同じ誤りが、教員に対しては誤りでないように考えられているのですから、世間の常識というものも、当てにならないものです。

こんなとんでもない常識が通用する世間ですから、大学出の「学士」が、高等学校教諭の免許状まで持ちながら幼稚園勤めとは、なんというだらしのないざまかと思う人があるのも、無理からぬことです。

ごく親しい昔の学友たちは、これとは別の意味で驚いたようです。それは「あんな男が幼稚園につとまるだろうか」という驚きです。いかめしくて、ぶっきらぼうで、およそ幼児教育などできそうなタイプの人間ではない。あの大声でどなりつけられたら、たいていの子は泣き出してしまうだろう、というわけです。昔、学校時代は「鬼寮長」という恐しい名で呼ばれたこともあり、戦地では勇敢な第一線小隊長でしたし、敗戦後は、まる四年以上も収容所のメシを食ってきた人間であってみれば、なおさらのことです。

このことは、友人だけの見解ではなく、実は私自身でも考えたことです。小学校でも高学年ばかり持っていましたし、それに続く中学校勤務でしたから、小学校低学年の経験もなく、まして幼稚園となると、全然見当もつかなかったのです。

私は、軍隊の学校も含めると、六枚の卒業証書を持っていますが、時代の移り変りの時期であったため、おもしろい経験でした。師範学校が県立であった時の最後の二部生であり、同時に、官立に昇格した師範学校の第一回の卒業生です。小学校が国民学校に変った当時で、専ら「皇国の道に則り」「錬成」をおこなうという、あの時代としての新教育の理念をたたき込まれた最初の卒業生です。私は、熱烈な愛国者でしたし（今も愛国者のつもりですが）「聖戦」を信じていましたので、なんとしてもがんばって勝ち抜かなければならないと思っていました（もっとも、広大な国土と物量を誇るアメリカに、まともな方法で勝てないことは予想していましたが）。しかし、「勤労奉仕」の名の下に、学校の大切な授業を平気で放棄することには憤慨したものでした。将来「大東亜」の指導者になるべき少国民に、しっかり勉強させておかないで、どうして盟主たり得るかと。

さて、中支の第一線で小隊長をつとめ、「人殺し」も経験した私は、対ソ戦に備えて満洲へ転進しました。満洲では、一戦も交えることなくすなおに武装解除を受け、続いてソ連の収容所生活を送り、昭和二十四年の末に復員、再び教壇へ立つ身になりました。

在ソ中に、私は、できる限りの方法で、ソ連の教育について研究してみました。本を読んだり、学校を参観させてもらったり、教師や児童と話してみたり……私たちのいた収容所では、所長が、かなり思いきってこのようなことをさせてくれました。そこで、ソ連では、革命後に約十年間「生活カリキュラム」を実施して失敗したことを知りました。

帰って来て、小学校のコアカリキュラムを見た時、すぐ「ああ、あれか」と思いました。単元の取り方が、三十年前のソ連のものと、あまりにもよく似ていたからです。もう一つは、アメリカで三十年前に流行した「教育測定」と、その反省に基く「教育評価」とが混同されていることです。更につけ加えると、アメリカでは少し時代おくれの「児童中心」と、比較的新しい「社会中心」の考え方が、これまた、いろいろな矛盾を持ちながら混在していることです。おもしろいのは、アメリカでは「ハイスクール」で実施されたコアカリキュラムが、日本では小学校へ持込まれたことです。私が予備士官学校で受けた「戦術」の教育は、最初の二カ月が系統的な講義で、三カ月目から先は、それを綜合した単元方式のものでした。

こんなことをいろいろ考えているうちに、「教育」というものがさっぱりわからなくなり、これはもう一度出なおすべきだと思って、新制大学には「編入」という便利な方法があるのを幸に、齢三十にして再び金ボタンの生活を送り、教育心理学を専攻してみたわけです。これがまた、新制大学の第一回卒業とあって、前の師範学校の第一回と対象的です。

正直に言って、私は、昔は幼稚園不要論者

でした。あれは、ブルジョアの子どもたちのための高級子守である、としか思っていなかったのです。教育心理学をやってみて、そうでもなさそうだとは思いましたが、まさか、私が幼稚園へなどとは、夢にも考えませんでしたし、幼児のことをまじめに勉強したこともありませんでした。大学を卒業してから、中学校で、音楽と社会科の授業を持ちましたが、私の興味は、教科の授業よりも、むしろ、学級経営やホームルームにありました。これより前は、教育の基礎は小学校にあると思い込んでいましたが、どうして、中学校教育も、それに劣らず重要であることを感じました。中学校は教科を教え込む所だという考えが誤りであることを、しみじみ感じたのです。人間形成という立場から、中学校の時期は極めて重要な意義を持っていることが、理クツではなしに、実感として迫ってくるのです。

おもしろいことには、小学校へ勤めていた時に無関心であった幼稚園が、中学校へ勤めるようになってから、私の関心を呼ぶようになったということです。中学校の教育を真剣に考えると、どうしても幼年時代にさかのぼって考えないわけにはいかないのです。

幼稚園へは、私の方から積極的に乗込んだのではなくて、恩師からのすすめに従い、全く見当がつかないという不安を持ちながらやって来たのですが、それにしても、中学校でのこのような経験が、私に幼稚園へ勤める決心をつけさせたわけです。

幼稚園の免許状だけは持っていましたが、これは、昭和二十四年の切りかえの時にもらったまでで、実際は何もわかっていなかったのです。そこではじめは、手当りしだい本を読んでみました。最初の一学期間は見習いのようなことで過ごしましたが、見習いからはじめなければならないような者に教諭の免許状をくれた「免許法」も困ったものです。もっとも、法を利用して、実力もないのに免許状をもらった本人も困ったものかもしれません。とにかく最初はがむしゃらでしたが、一学期の終りに研究発表をしなければならなくなり、まだ保育も一人前でない時でしたので、勝手な理クツをしゃべったものでした。

その年の二学期から正式に一学級を担任するようになり、現在に及んでいます。現在は、完全に一人で四十一名の担任をやっているほか、園の経営や経理についても責任を持たされる立場にあり、実は負担過重で痩せ細りつつあります。

小学校や中学校での経験から考え、また現在の幼稚園の経験から考え、更に教育心理学の立場からしても、幼児教育の重要性が、もっと世間で認識されなければなりません。その認識は、棚ボタ式にできるものではありません。われわれ現場教師が、そのための積極的な啓蒙運動をするのでなければ、百年河清のたとえに終ってしまいます。

「男の先生」ということで何か書いてくれとのことでしたが、少し見当外れのものになりましたので、最後に一言つけ加えておきます。私は、幼児教育を女任せにすることは正しくないと思っています。もっと男が参加しなければウソだと思うのです。男が幼稚園の先生になったと不思議がる世間こそ、不思議な世間だと思います。(島根大学付属幼稚園)

書評

小川正通訳著

ソ連の幼児教育

山下俊郎

ソ連の文化のいろいろの面は、アメリカとの対立において見られる意味において、かねてからわが国の人々の注意をひいていたのであるが、昨年人工衛生の打揚げの輝かしい成功にわたくしたちのソ連に対する関心はさらに高められてきたかの観がある。わたくしたち、幼児保育に関心を持つものにとっては、ソ連の将来の文化を支配するであろうところの今日の幼児たちがどのように保育されているかということは最も大きな関心をよせる問題である。ところが、この点については、断片的な視察談は今までしばしばわたくしたちの目や耳にふれたのであるが、まとまったものには接することができなかった。

小川正通氏のこの訳著は、東ドイツでドイツ語にほん訳されたソ連のソローキナの著書「就学前教育学教科書」(A. I. Sorokina, Lehrbuch Der Vorschulpädagogik. 1955)を圧縮、抄訳して紹介されたもので、わたくしたちはここにはじめてソ連の幼児教育の全体の姿を、体系的に知ることができることになったわけである。この原著は、ソ連の幼稚園教員養成のためのテキストであり、ソローキナの他に二三人の教育学者も応援執筆した書物だそうである。そして、原著は、二四章八五節から成るぼう大な書物であるが、これを二一章、五九節に圧縮して、要領よくまとめられてある。いままでじゅうぶんに知ることのできなかったソ連の幼児教育をここに紹介して、わたくしたちに新しいいぶきを与えて下さった小川氏に何よりもまず深い感謝をささげたいと思う。

限られた紙面で、内容の紹介をすることができないので、各章の題目だけを順次かかげてみると、次のような題目によってこの書は展開されている。ソ連の教育および教育学の目標、就学前教育の発展、三歳までの教育と集団教育、就学前教育の目標、就学前教育の原則と内容概説、身体教育、日課および衛生的習慣の養成、遊びとその指導(一、二)、仕事とその指導、道徳教育(一、二)、労働による教育、精神教育、国語教育、数教育および美的教育、観察および楽しみとその指導、幼稚園の教育計画と教育活動の評価、幼稚園の組織と管理、幼稚園の教師、幼稚園と家庭、幼稚園と初等学校。

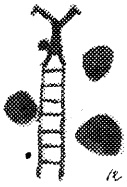
この各章の題目からうかがわれるように、三歳から七歳にいたる幼児にどのような教育がなされているかが、あらゆる面から分るように解説されている。制度として、幼稚園が全部国公立である点は誠にうらやましい限りである。しかし、ここに展開されている幼児教育は共産主義の理念によっておこなわれているものである点については、いろいろ批判する余地もあるようではある。けれども、わたくしたちに新しい視野をひらかせて下さった小川氏のこの好著に教えられるところが多い。あえて一読をすすめたいと思う。

(B6判三一九頁。理想社刊。三五〇円)

創作童話

ふしぎな木の実

——うつぼ物語より——



村井トミ

一月号の「うつぼ物語」を読んで、そこからヒントを得て童話を創るようにとの編集部の依頼だった。このような古文から童話をつくるのははじめてなので、どんな話が出来上るか、心もとないことだが、まず原文を読んでみた。

原文をかいつまんでみると、清原の俊蔭が遣唐使として召され唐土に渡る途中難船し、かろうじて波斯国に漂着する。悲しみのあまり観音を祈ると青い馬があらわれ彼をのせていく。そして栴檀の下で虎の皮を敷いて琴ばかりかなでている三人の人に琴を習う。その中に西の方に三年間も絶えない響の高い斧の音をききつける。その高い木の響は琴の音に通い合っているので、どうかして琴を一つ造るだけの木を手に入れようと思い斧の音を訪ねて、山を越え谷をわたり苦労を重ねてたどりつく。そこには天にとどくばかりの山がそびえ、そこに深い谷に根をはり、先は天にとどくほどの大木の桐の木があり、そこに見るからに恐ろしい阿修羅が老いも若きも皆集って木を切りこなしている。俊蔭はここで命をおとす覚悟の上で、阿修羅の中にただ一人入っていく。阿修羅は恐ろしい形相で、ここへ来るものは皆食べてしまうことになっているが、人間の身でどうして来たか、と牙をかみ出して怒る。俊蔭は涙を流しながら日本国の使として父母の悲しみをふりすてて、ここまで渡って来た苦労は並大抵のことでないことを話す。阿修羅は、日本の国で血の涙を流し

ながらわが子俊蔭を待っている親のいることを聞いて特別に命をとることはやめ、大般若経を書いて昔犯した阿修羅の罪を供養してくれと言う。俊蔭は長年父母にひどい悲しみを与えていたので、せめてそのつぐないとして、そこに切り倒されている木の片はしを頂戴できれば、それで琴をつくり、いい音を父母に聞かせて慰めたいと、木のはしをもらうことを懇願する。

ここで一月号は終っている。

そこで人によっていろいろとヒントの得かたもちがうと思うが、私はこれを読んで次の三つのことを感じた。

一つは難船して漂着した鳥、獣一ついない海岸に突然鞍をおいた青い馬があらわれていななき、俊蔭をのせて走るという奇蹟的なことが起ったこと。これはいかにも愉快だった。

もう一つはあらゆる苦難にぶつかりながら希望を捨てずに目的にたどりつく。しかも一口に食べられてしまいそうな恐ろしい鬼の中にふみこんでいく、というところに冒険的な面白さがあり、もっと先をよみたい気持になった。

もう一つは何ものにも、何事にもかえられない親と子の美しい情愛、の点だった。

それで前の二つ、奇蹟と冒険的な考が頭の中をぐるりとまわり、勝手な想像の翼が、でたらめにのびていった。

不思議な木の実……一つしかならない白い木の実……高い山……白い小鳥がたくさんとびまわって木の実を守っている……魔法の力をもった恐しい大男が木の下に住んでいる……誰か取りにいく……大きい山、岩……黒い雲……大粒の雨……流される……救い……奇蹟

どこまでいってもきりがない。頭に浮んだままに筆をとってみることにする。

ふしぎな木の実

ある高い高い山の上に一本の木が生えていました。この木にはたった一つだけ白い実がなっていました。まあるい木の実。そして不思議なことにこの実は一年中いつも落ちずについていました。そしてこの木の下には恐ろしい大男が住んでいて、魔法の力を持っていて、たくさんの白い小鳥がこの白い実を守りながらとんでいるということです。

おとなも子どもも年寄りも皆この実のことを知っていました。でも今までこの白い実を取りにいった人は誰も二度と帰っては来ませんでした。

一郎さんは心の優しい子どもでしたが、魔法の木の実のことがいつも心にかかって何とかしてその実をとってみたいと考えていました。

ある晩のことです。

一郎さんは夢をみました。乞食のようなな

りをした不思議なおじいさんが枕元に立っているのです。「早く行け、早く行け」というように、おじいさんは杖を二度山の方を指すといつの間にか消えてしまいました。

一郎さんはとび起きました。何だかいそがなければならないような気がしてただ一人家を出ました。

あたりは真暗です。どの家も静かに寝ています。犬も小鳥も寝ています。一郎さんはこんな夜中に外へ出たのははじめてなのに不思議にこわくありません。何だかさっきの夢の中のおじいさんが守ってくれるような気がしてならないのです。

どんどん、どんどんかけていきました。とうとう山の下まで来ました。

さあこれからたいへんです。見上げても先も見えないような山、見ただけでもため息がでそうです。でも一郎さんはどんなことがあっても今日こそ白い実の所まで行ってみようと思いました。

木がぎっしりと立ち並んでいる間に細い道がありました。ごろごろ石ころがころがっていたり、木の枝が長くのびていたりして、ころんだりくぐったりしながら一郎さんはだんだんにその道を登っていきました。

急にザワザワと枝がゆれたと思うと大きな鳥のようなものがとんでいったようでした。足もとをちょろちょろと何かが通り過ぎました。そのたびに一郎さんはどきんとしたり青くなったりしましたが、こんなことで負けてはたいへんと思ってがんばりました。元気をつけるようにわざと大きな声で歌をうたって歩きました。その歌声に誰かが答えるような気がして耳を澄ましました。でも誰もいるようすがありません。

急に眼の前が明るくなってきたと思ったら、大きな岩が折り重なっている岩山の所に出ました。いつの間にか夜も明けて朝になっていました。お日様がまぶしいくらいに輝いています。岩のわれ目に細い川が流れています。きれいな水です。川の底の石ころまでよく見えます。どこにも道がついていません。岩をよじのぼるより仕方ありません。うっかり手を離したらそれこそたいへんです。しっかりつかまりながら少しずつ少しずつ岩をのぼっていきました。

ふと見上げると大きな岩の一かたまりがころがり出し今にも一郎さんの方へぶつかりそうです。

アッ！一郎さんは思わず眼をつむりました。もう駄目だと思いながら思わず、「おじいさん！」と叫びました。夢の中のおじいさんのことでした。

すると不思議なことに急にその石が反対の方向にごろごろころがって行ってしまいました。一郎さんは夢中で岩をよじのぼり岩の上に出ました。

すると今度は青空が急に消えて黒い入道雲がもくもくと動き出し、まったく行く先が見えなくなってしまいました。雷がなり、いなずまが光ったり、痛い程の大粒の雨が降り出したと思う間に水に押し流されてしまいました。どこをどう通ったのか、流されたのかよ

くわかりません。一郎さんは思わず
「おじいさーん、おじいさーん」
と叫びました。
するとどうでしょう。どこからか、スーッと木の枝が頭の上にのびてきました。一郎さんはいそいで木の枝につかまりました。枝はぐんぐんのびて一郎さんを広い芝生に下しました。そこはやわらかい緑の草が一面に生えていて、まるでビロードの園のようでした。
一郎さんは何度も眼をこすりながら大きな眼をみはりました。
なぜってその緑の草の上に一本の木が生えていて、白い木の実が美しく光りながらなっているではありませんか。
そろそろ白い小さい小鳥があちこちとび交しています。
これだ！
と思うと一郎さんは思わずブルッとふるえました。驚ろきと喜びが一度にきたのです。木の下に小屋がありました。これこそ恐ろしい大男の小屋にちがいありません。せっかくここまで来て大男に見つかってはたいへんです。そうっとそうっと家の中のようすをうかがいながら木に近づいていきました。大男はすごいいびきをかいて寝ていました。
一郎さんは急いで木に登って白い実を取りました。
すると不思議、不思議、その辺をとんでいた白い小鳥たちが皆かわいい人間の姿になって一郎さんのまわりに集ってきました。この子どもたちは大男に魔法で小鳥にさせられていたのかもしれません。
大男は—とのぞいてみると、これも不思議いつの間にか大きな黒い鳥になって小屋の中で大きな羽をバタバタと動かしていました。
皆はどんどんかけて山を下りていきました。登る時はあんなけわしい山が、帰りには立派な道になっていて、どんどん下りられるのです。
もうここまで来れば安心です。
皆はお互によろこび合って仲よく手をつないで山を下りていきました。　（おわり）

何だかだらだらと、まとまりのないものになってしまった。頭に浮かぶままに書いていたら思いがけぬ結びとなってしまった。
さてこれを実際に年長組の男の子などに話したとしたら果して喜んで聞いてくれるかどうか？　疑問である。
しかしよい童話にはならなかったかもしれないが、私自身想像の世界に遊んだことは確かであり、その点はしばしの間たのしい思いをした。
おとなもおとなばかりの世界に、いつも当然のようにいないで時にはこんな時間もかえって必要ではないのかしらなどと思ったりした。

施設の改善

—施設研究大会に参加して—

清水桔梗

(一)

今更らしく幼稚園教育の目的をもちだすわけでもないと思いますが、施設設備を改善するについては、たえず幼稚園教育の目的を考えて、それに添って改善しなければならないと思います。ついては、いまいち度、幼稚園教育の目的を思い出してみようではありませんか。

学校教育法の第七十七条に、『幼稚園は、幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。』と目的を規定してあります。

〝幼稚園は、幼児を保育し〟と極めて簡潔にまとめてありますが、これには重要な意義が含まれているものと思います。どんなふうに子どもを保育するかということが問題です。つまり経験の乏しい子ども、家庭というあたたかい家族集団のなかで、はぐくまれてきた子どもを、はじめて大勢の仲間のある集団、同じような要求を持っている集団の中で保育をすすめるのですから、よほど考慮しなければなりますまい。うっかりしていると、急に大勢の仲間同士のなかで生活するのですから、神経質になる心配があります。あるいは、思いがけない非道徳的なことを見習うかもしれません。こんななかにあって、将来の日本を背負って立つ子どもに育てるのですもの、〝幼児を保育し〟は、なみたいていではありません。そこでその方法として〝適当な環境を与えて〟と規定してあるのでしょう。環境といってもこれまた実に多方面にわたって考えなければなりますまい。必ず心を伸すための環境、身体の成長を助けるための環境とにわけて考えることができます。そしてその環境が、材料用具のような小さいものから、施設設備のような大きいものにいたるまでが配慮の対照となります。

環境を配慮するとは、いうまでもなく、〝その心身の発達を助長することを目的とする。〟と述べられてありますように、心身の発達を助長することのできる配慮をしなければならないことであります。

入園当初は珍らしいので、備え付けられてある施設設備のすべてに感心を持ちつづ

けますが、なれるにしたがって、おのずから興味のつづくものとつづかないものとができてまいります。興味のつづくものは、心身の発達に適合したもので、つづかないものは、程度のひくすぎるものか、高すぎるものであります。一例をあげますと、高さ一四〇センチメートルで斜面の長さ三〇〇センチメートル位のすべり台でしたら、一週間位は押すな押すなの盛況ですが、ぼつぼつ興味がうすらいできます。そんなとき、頂上に綱をつけて、その綱を持ってのぼれるように工夫しますと、子どもたちは、ちょうど登山でもしているような気分でのぼっていきます。しかも、幼い子どもの扁平足の矯正の役立ちにもなります。

このように設備されている運動具、あるいは建てものを幼稚園教育の目的にそって改善しなければならないと思います。

(二)

ダムの建設などがいちじるしく盛んになってきたので、頓に電力事情が全国的によくなってまいりました。そのため電気器具が出廻り、生活が都鄙をとわず明るく能率的になってまいりました。例を農村にとってみましても、農器具が機械化されましたし、台所には洗濯機が、座敷にはテレビがおかれるような文化生活がくりひろげられております。ところが、共同生活の場であり、地区の文化を推進しなければならない使命をになっている幼稚園や保育所が、相変らずテレビはおろか、ラジオ設備さえ未だしのところがかなりあると思います。

生活の水準が一般に高くなって、農漁村でもどんどん文化的に進んできているのでありますから、何はおいても幼稚園や保育所が進歩的な、啓蒙の意味も含めて施設設備を改善していかなければならないと思います。

改善にあたっては、いうまでもなく、子どもの成長発達をたすけ、安全な生活のできるものにしなければならないことは論をまつまでもないと思います。

近頃、近代感覚のすぐれたすばらしい幼稚園や保育所が、あまた新築、あるいは改築されて、それぞれの地域にデビューしてまいりました。ところが、上から下までガラス張りの障子があったり、明るさを取り入れるために、大きい窓ができたりしていますが、考えなければならない点があるのではないでしょうか。

さしあたり、一面にガラスのはいった障子だとすると、どうしても子どもの生活が制限されましょう。ボールをなげてはガラスがわれないか、おしくらまんじゅうをしては破れないかと、子どもも教師もたえずはらはらしなければなりません。また、窓が大きくて、子どもの臍より下に窓の敷居が、万が一にもありましたら、身体の上部に重心のある子どもは窓のそばに行くたびに危険な状態になることは必定です。一人の教師が大勢の子どもをあずかるのですから、なるべく危険のない安全な生活の場にして保育しなければ、教師の気分も落ちつかないと思います。ここに新感覚の建築をしたり、改築をしたり、改善をしたりする場合に、考慮を払わなければならない点が多々あると思います。

(三)

子どもの安全と施設設備とは大いに関係のあることで、教師はとくに配慮しなければならないと思います。例えば、集団生活で一番教師が心配するのは、地震の時でしょう。台風も心配、火災もたいへんでしょうけれども、地震ほどではないでしょう。

都会の幼稚園は土一升金一斗というほど地価の高いところに経営されているのですから、思いきり広く敷地をとることができません。都心に近づくにしたがって、二階だての園舎が多くあります。こんな時、地震がひとゆれゆれでもしようものなら、とても混雑して避難に骨が折れます。そんな時、階段に避難用のすべり台が設備されていると、四十人のクラスなら四十六七秒で階段をおりることができます。まったく驚異的な速さで避難することができるのです。

だんだん新しい施設がうまれてきますと、子どもたちは下ばきのままで遊園や保育室にいききしていたのが、保育室の前ではきものをぬがなければならないようになってまいります。それは保育面が広くなってとてもよいのですけれども、一朝非常の場合には、靴をはいている時間が惜しいのに、子どもは校舎が倒れそうになっていても、平気で自分のはきものを探しもとめます。

ずいぶん昔のことになりますが、京阪神地方をおそった世界的な台風—室戸台風—の時は、大きい建てものが倒壊しました。とりわけ学校が数多く倒れました。そしていたいけな子どもがその建てものの下で犠牲になりましたが、自分の持ちもの、はきものをとりに行ったために、尊い生命を失ったというのがかなりありましたようです。

このことを思うにつけ、下ばきをぬいで保育室に出入りする幼稚園の多くなったことを悲しみます。幼稚園を清潔にし、保育面を広くするということはとても大切なことですけれども、子どもの生命にはかえられないと思います。施設の改善には、このへんを子ども本位に考えたいと思います。

それには、園舎のどこか一隅を必ず頑丈な鉄筋建築にする必要があると思います。過日〇〇市方面へ視察旅行に出かけて、その地域の幼稚園にお邪魔いたしましたが、建てもの全体が鉄筋の独立園舎でした。しかもその経費の全額を教育委員会が負担しているときいてうらやましく思いました。より幼い人間の生命を大切にするということが、地域をあげてわかっておられるのだと思いました。

(四)

最近ある大学の正門が改装されました。門前を通って勤めにでていく人々が、期せずして、異口同音に「まるで刑務所のような感じになってしまった。木造の扉のこわれかかっているのもあまりよくないが、がっちりとライオンのおりのような防撓でできたのは、まったく学生を囚人に見たてたように思える。感じがよくない。」とこもごも語りながら通っているのをききましたが、その通りであります。相当な経費をかけて改装しながら、前より悪い感じのものになったのは残念でした。大学ばかりでは

ありません。高等学校、中学校、小学校、幼稚園にいたるまで、気持のよい明るい施設設備に改善したいものです。また改善したことによって、罪人ができたり怪我人ができたりしないように設計したいものです。

ある小学校がやはり門を新しく木造で造りました。頑丈な門です。少々登っても大丈夫という門です。門が丈夫になると小学校の子どもは安心感を持つのでしょう。門のとざされたあと家に帰る時、校務員室まで行ってたのんで門をあけてもらうのが面倒なのか、数人の子どもは、横木を足かけにして門のなかから門の外に出て来ました。私はおどろいてしばらく眺めていましたが、門が丈夫になったので、安定した気分で上って来たようです。勿論門がしまっていたら、校務員室まであけてもらいにいくのが当然ですけれども、平気で乗りこえをするのです。子ども自身の判断力も足りませんが、施設の改善のおかげもあると思います。

このように、改善したために感じが悪くなったり、悪用されたりしないですむようにありたいものです。

(五)

施設研究大会が発足して六年たちましたが、施設設備の改善のために、あるいは保育の進展のためにまことに役立つよい会合であったと思いました。けれども大会を持つ地方はとてもたいへんなことでした。正会員が少なくて、当日の会員に期待をかけるという運営の仕方ではとても不健全だと思いました。正会員が少なければ少ないように、あまり大きい会合にしようと望まないで、落ちついて静かに、真剣に研究のできる雰囲気をかもすような会にすればよいと思います。

私は、今年はじめて施設研究大会に参加したのでありますが、研究発表に、協議会に、なかなか参考になる事柄がたくさんありました。

大会で数々発表されたものを参考にして、帰ってから着々新しい施設を充実しておられる幼稚園や保育所が、いくつかあることと思います。いつの場合にでも、私どもの設計するのは教育の場をするので、決してホテルや文化会館を設計するのではないということを、頭におきたいと思います。必要以上に華美になることをさけ、気分が落ちつかないような色調にすることはやめたいものです。明るく朗かではありたいのですが、もしかして落ちつかなかったら、禍根を子どもの生涯に及ぼすことになりますので、注意したいと思います。

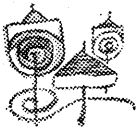
要は、施設が保育をすすめるのでなくて、やはり教師が保育をすすめるのであることを自覚したいと思います。

金殿玉楼のように立派な園舎が建っても、そのために子どもの自由が束縛されたり、活動に制限が加えられては気の毒です。万一そんなことにでもなったら、青天井で保育する方がはるかに効果的だということになります。施設に使われて遊ばせるのでなくて、施設をうまく使って遊ばせるようにしたいものです。

(大阪市立大宝幼稚園長)

保育の工夫

幼児に与えるお話の工夫



早瀬渥子

お話は幼児の心の友だちです。良い友だちが相互に良い影響力を持つように、心の友だちも、当然、彼らに深大な歓喜を与え、さらに情操を豊かにしたり、探求心や知識欲を旺盛にしたりするものでなくてはなりません。心の友だちと遊んでいるときには、彼らは愉快な楽園をかけめぐり、眼をみひらいて未知のものを探し求め、まさに何かを得ようとしています。幼児は興味のある身近なものに関するお話に耳を傾けることをよろこび、次第により多くのものに興味を持って聞くことが出来るようになってきます。お話は幼児の心の友だちです。幼児は「お話」に包まれ「お話」に感化され、お話の世界に成長していくと云っても過言ではないでしょう。

私はこのように、幼児に与えるお話に非常に興味を持つようになり、既成のものばかりでなく、その時おりの幼児の興味に合せ、彼らに関係のあるお話を自分で作ってみたくなりました。しかし、幼児に対して強い影響力を持つお話を、はたして作ることができるでしょうか。お話は無分別に与えるとき、すなわち幼児の心理的な機能の発達程度を考慮せずに与えるときは、もちろん彼らの心や素朴な想像力に悪影響を及ぼさずにはおかないと思います。私は幼児により多くの夢をいだかせ、お話を通して、想像活動をよりいっそう豊かにしようと思いました。そしてバクのように真剣に聞きいる彼らの眼を思いうかべながら、お話について考え、学び、工夫し、道を歩きながら、あるいは窓からぼんやり外を眺めながら、お話を作るようになりました。

私はお話を作るときに、次のようなことに注意しました。私はおとなであり、幼児の世界との間には大きなへだたりがあります。まずそのへだたりを無くし、少しでも幼児の素朴な心の世界に接近するために、童心にかえって努めて幼児に接し、その考えかたや感情、思想、行動面をこまかく観察するようにし、次に彼らの興味のある親

しみやすい題材をえらび、明るい動的な内容に、適当な長さ、活動性、反復性、空想性などの考慮を加え、むやみに複雑になることを避けるようにしました。

私は四月から毎週一日、付属幼稚園で教育実習をしましたので、ここに私が自分でつくったお話を中心とした保育の一日をしるしてみました。

○クラスの環境

幼児年齢　三歳児

在籍数　十五名（男子七名・女子八名）

○最近、九月の幼児の生活状態

三歳児なので長い夏休みのあと、家庭生活への恋しさがいくらか残っているようであったが、幼稚園生活の習慣は案外早くもどり、遊びの内容も少しずつ進歩して三歳児なりにできるようになってきた。

○遊びの種類

（天気のよい日）ぶらんこ・砂遊び・すべり台・ジャングル・太鼓橋・自動車のり・組木・ままごと

（雨の日）絵本・組木・ままごと・まりつき・描画・人形芝居

保育室には金魚・せきせいいんこ・きりぎりす・でんでん虫を飼っているが、最近はとくにでんでん虫に興味を持ち、楽しそうに歌をうたいながら観察している。これは子どもたちが探し集めたもので、村井先生が鉢に入れ、緑の葉をしいて、穴をあけたビニールをかけたものです。

○実習日への準備

一、でんでん虫のおめんの下絵をかく。

一、でんでん虫を主題とするお話を創作する。

一、そのお話を画にかいて紙芝居をつくる。

九月二十四日　火曜日　晴

○目標

・最近、とくに興味を持っているでんでん虫のお面をつくらせて楽しく遊ばせる。

・でんでん虫のお話をしたり、紙芝居を見せたりして話し合いができるようにする。

九　時　登園、視診

十　時　製作、でんでん虫のお面をつくる。

十　時三十分　お話、でんでん虫のお家（自作）

十　時四十分　リズムあそび（紙芝居を用いて誘導する）

十一時　十分　降園準備

十一時二十分　降園

○保育記録

窓を開けると清澄な青空が私を力づけてくれた。花の水をかえ、周囲をざっと掃除

して気持よく室内を整えた。日曜日、秋分の日と二日休みが続いたので、とくに登園する子どもたちをあたたかく迎え、遊びに誘導するように心がけた。

八時半頃からひとりふたりと登園してくる。子どもたちは挨拶・手洗い・うがいをする。今日はお休みの翌日なので遊びたい気持をじゅうぶん発散することができるように、おもに外遊びの方へさそった。時おり、机上のでんでん虫に夢中になり、手洗い、うがいを忘れた人もいたのでうながした。さんさんごご登園、九時二十分頃皆がそろった。半数以上がお砂場で遊んでいる。男子は汽車ごっこ、女子はお菓子屋さんごっこ、同じ砂場にいながら別々の遊びをしている。

十時頃から「お部屋のでんでん虫さんがA子ちゃん、K子ちゃんに遊びに来てちょうだいって呼んでるわよ」、と二、三人ずつ、保育室から離れた所で遊んでいる子どもからさそい、でんでん虫のおめんをつくり始めた。ひとりだけ男の子で作ろうとしない子どもがいたが、「Nちゃんもでんでん虫になって、みんなと遊びましょう」と云うと、「僕も作る」と意志表示して作りはじめた。お面をかぶり、各々がでんでん虫になったつもりで、本物のでんでん虫と何か話しあっているようにみえた。Uちゃんが歌をうたいだした。それに合せてみんなもうたいだす。

「みんなかわいいでんでん虫ね、先生、でんでん虫のお家というお話をしましょうか」

ここで私の自作のお話をはじめた。

きのうも、その前の日もお休みだったでしょう。みんなはどこへ遊びに行ったかしら。先生はね、でんでん虫さんの所へ遊びに行こうと思ったの。

きのうは、今日のようにお天気がよくって、とても気持がよかったわね。先生はおべんとうを持って出かけました。「でんでん虫さんのお家はどこか」って「お山の中よ、お山には木がいっぱい生えてるでしょう、その木の葉の上なのよ」先生はお山へいきました。そして、大きな木の下で云いました。

「でんでん虫さん、こんにちは、遊びに来たの」あたりはとても静かでした。けれども何も返事が聞えません。今度は少し大きな声で呼びました。

「でんでん虫さん、遊びましょ」

木の葉は風に吹かれて、かさかさと音をたてました。けれどもやっぱりでんでん虫の返事は聞えませんでした。今度はもっと大きな声で云いました。

「でんでん虫さん、遊びましょ」

どこからかパカパカと足音が聞えてきます。おやおやお馬さんですよ。

「もしもし、でんでん虫さんですか、でんでん虫のお家はずっとずっと向うの方ですよ。さあ、私の背中におのり下さい。つれて行ってあげましょう」

先生は喜んで馬の背中にのせてもらいました。バカバカバカバカとても速く走ります。しばらく行くとお馬さんが云いました。

「僕、おなかがすいちゃった。お昼ごはんを食べてないのでもう走れないよ」

「まあ、私もまだなのよ、お休みしておべんとうを食べましょう」

木の下でおいしいおべんとうを食べていると「やあ、おいしそうだな」とお猿さんがやって来ました。「なーに」と兎さんも来ました。先生は皆におべんとうを分けてあげて仲よくたべました。それから皆で楽しく遊びました。あまり面白いので夢中になって遊んでいるうちにあたりはだんだん暗くなってしまいました。

「困ったわ、暗くって何も見えない」

先生は木のかぶに腰をおろして寝てしまいました。静かな夜です。お月さまがそっと登ってきて、あたりが明るくなった時です。ゆっくりゆっくりこちらに近づいてくるものがあります。

「もしもし、そんな所で寝ていては風邪をひいてしまいます。さあ、私のお家におはいり下さい」

そう云ったのはでんでん虫です。でんでん虫のお家はお月さまにてらされてとてもきれいに光っていました。

「ありがとう、でんでん虫さん」

先生はそう云って、でんでん虫のお家にいれてもらいました。するとでんでん虫はまたゆっくりゆっくり動きだしたのです。

「まあ、何てきれいなんでしょう」

でんでん虫のお家の中は、赤や黄色のクレヨンで描いたお花畑のようです。どこからかピアノの音も聞えてきました。先生はいろいろなおゆうぎをして遊びました。でんでん虫はゆっくりゆっくり動き続けています。そっとお窓から外をのぞいてみました。

「私のお家が見えるわ、お父さんとお母さんが手をふっている」

先生は大きな声で叫びました。それでもでんでん虫はだまってゆっくりゆっくり動き続けていました。

（おわり）

「先生はでんでん虫とおわかれするときに、おみやげをいただいたのよ。あけてみましょうか」

私の描いた紙芝居をだし、二、三人に一枚ずつゆきわたるように与え、順にまわしながらみた。

その紙芝居を用い、その場面場面をリズム表現し、お話を聞いたときの緊張をときほぐすことができるように、のびのびとおゆうぎをした。皆とても楽しそうだった。

時間が十一時十分になったので、お帰りの仕度をし、さようならをした。

（お茶の水女子大学保育実習生）

× × ×

（ヨーロッパの旅）

再びドイツでの生活

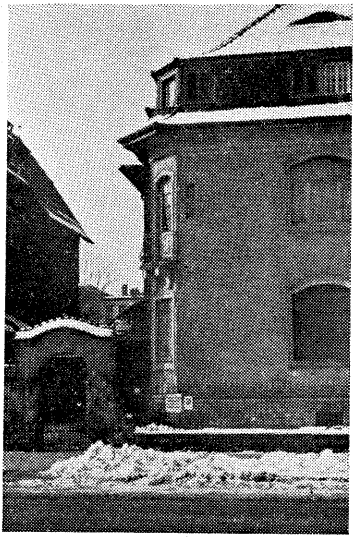
平井信義

霧の立ちこめている朝が続く二月は、八時だというのにまだ暗い。部屋の電気を消して廊下に出ると、足さぐりで歩かなければならないほどである。隣の部屋は森閑としている。台所には水の落ちる音もしない。ベッカーばあさんは、まだ寝ているのである。明けるに遅い朝のひと時を、床の中で十分に楽しんでいるらしい。

廊下は十歩も歩けば入口のドアにつきあたる。手さぐりで把手を求めてそれを廻すとがちゃがちゃと鳴る。それは毎朝のことなのだが、その度に、何故か私ははっとする。ベッカーさんの睡りをさましては悪いという気が、私をはっとさせるらしい。

ドアは音もなく階段の方に向ってあく。しかしこのドアだけは、閉めないとしまらない。ところが、閉めてしまうともはやあかないのである。錠がおりてしまうのである。そのガチャリという音をきく度に、私はもう一度はっとする。もうこの扉はあかないのだ。取って返すことの出来ないのだというような気持がする。この気持から開放されたのは、十ヵ月の留学を終えてドイツを去ろうとする頃であった。

階段の降り口に押しボタンがついている。それを押すと、階段を照らす電気がともるのである。コの字に曲った階段の、それぞれの段についている真鍮のとめ金が鈍く照り返す。その光を目差しに受けながら降りていくのであるが、三分間だなと思うと気ぜわしい。三分たつと自動的に電気が消えてしまうのである。勿論、三分あれば、どんな年寄りであっても悠々降りることが出来る。しかし、何



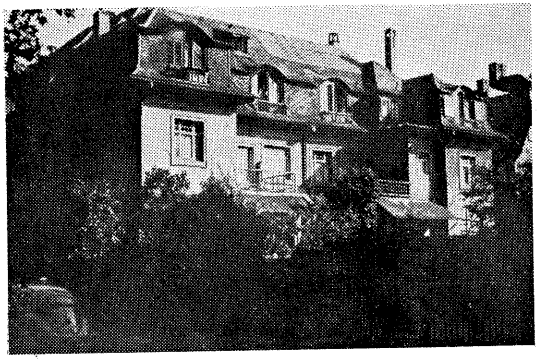
となく気ぜわしいのは、こうした生活にまだ慣れていないためなのであろうか。

私の性質のためなのであろうか。あるいは三分間という時間の故であろうか。

内玄関の戸口に立つ。ここの把手は、二重に鍵がかかっていない時ならそれを廻しただけであくが、鍵のかかっている時には二回廻さないとあかない。勿論、いずれにしても外からではあかないのであるが、この扉は鍵をかけた上に鍵をかけるような仕組みになっている。その仕組みが完全におこなわれていると、外からあける鍵を持っていても、あけることは出来ない。何と念の入ったことだろう。面倒なことだろう。私はいつもそれが煩鎖でならない。時間がないときなどは怒りさえも発することがあった。何だってこんなに鍵をかけやがるのだと、つぶやいたこともあった。

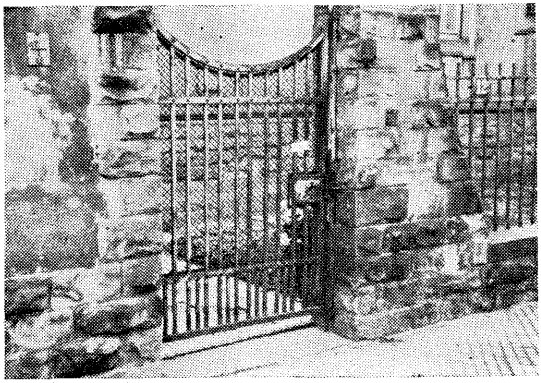
鍵を使う戸口はその玄関の扉で終るのではない。もう一つ、門があるのである。石畳を七・八歩あるいたところに門があって、鉄の格子にとりつけられた鍵は、内側からなら把手を下に降せばあくようになっている。しかし、それがガチャンと私の背後でしまってしまうと、もはや、押しても叩いてもあかない。鉄の格子がわずかにきしむ音だけが、あざ笑うようだ。しまった時に私はまたハッとする。そして、右のポケットに手をあてがうのである。

そのポケットの中に、確かに鍵が入っているはずである。それが確かめられれば、初めて安堵する。そして、こつこつと大学へ向けての足音を舗道に響かせるのである。ところがポケットに鍵の鳴る音がきこえなかったらみじめだ。私はかあっとのぼせてしまう。自分一人では我が憩いの部屋があるこの家に入れないのだ。



自分の部屋・二階の入口・玄関、そして鉄の門と、それぞれの鍵を渡されて、下宿が決ったのであるが、鍵を使いなれな

い私は、よく鍵にはまったその鍵束を、部屋の机の上におき忘れて鉄門を出てしまうのであった。鉄門を出てしまって鍵のないことに気付いても、もはやどうにもならない。鉄門の脇にある呼鈴のボタンをおして、ベッカーさんを起さなければならないのである。大学から帰って来た時に呼鈴をならしてもよいのであるが、もしベッカーさんが家にいなければ、金輪際あかないのである。家の周囲をうろついているか、どこかにたむろしていて、ベッカーさんが帰る頃を待っていなければならない。そんなことを三度も続けたことがあった。



それに懲りて、門を出てすぐに気付いた時には、遠慮なくベッカーさんのまどろみをさますことにした。呼鈴を押す。しかし、なかなか反応がないのである。いつまでたっても反応がないのである。待つ身には一分も長く感ずる。しかも二月の戸外は、零下十度前後であるから、外套をしっかり着ていても、寒さは骨身にしみ、足を凍らせるのである。再び呼鈴をならす。寝床から起上ってナイトガウンをかけ、不精々々に自分の部屋のドアの鍵をガシャガシャ言わせているベッカーさんの姿が想像される。

しばらくして、玄関の上の小窓があいて、ベッカーさんの目がのぞく。「Wer ist da? (ヴェア・イスト・ダァ?」——半ば怒ったような冴かるような声が強く鼓膜に響いてくる。Wer ist da? を訳するとどなたですか?」ともなるが「誰だっ!」を訳したって一向差支えない。私にはむしろ「誰だっ!」という感じに受け取れてしまう。

「私ですよ、平井博士です。(ドイツでは自分の名前を言うときにも、称号をつける)鍵を忘れたのです」——つい哀願するような声になる。しかし、その声は静まり返ったこの舗道のそのあたりに凍えついたように響き迷っている。

俄かに、鉄門が「ジジー、ジジー」と鳴り始める。電気仕掛けで錠前がはずれている音である。その時に力ずくで押せば、鉄門は開いてくれる。しかし、鳴り止んでからではびくともしなくなるから、急いで押さなければならない。私の心もせく。

鉄門を通過しても、玄関の戸口で再び「ジジー」という音を待っていなくてはならない。あるいは、玄関の扉にいきつく前に、すでに鳴っていることがある。そのようなときは一層気ぜわしい。しかし、文句をいっているどころではない。扉を押すことを実行しなけ

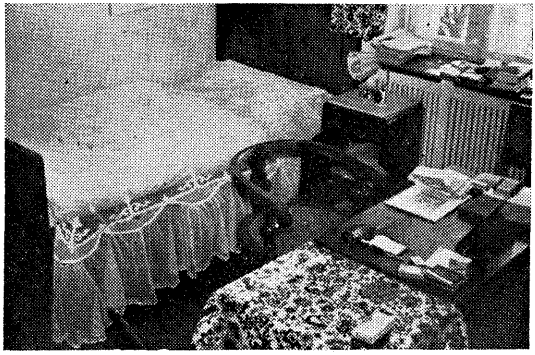
ればならないのである。

階段を二段ずつかけ上る。すでにベッカーさんが電灯のボタンを押してくれている。三分間のともり火であるという気と、すでに大学への時間が遅れているという焦りが、私の足をせかせるのである。

二階の戸口は半開きになっていた。ベッカーさんがあけておいてくれたのである。そして、ベッカーさんはすでに寝床へ戻っていたのである。私は彼女の戸口を通りざま「どうもすみません」と声をかけたが、返事がない。ベッカーさんは蒲団にもぐってしまったのであろう。私の声のみが廊下に籠っていた。

私の部屋の鍵は、ベッカーさんの部屋の向いに掛ける場所がきまっている。しかし、鍵を忘れるような朝は、部屋の内側に差し込んだままになっている。私は戸をあけて、再び電気スイッチを下す。ぱっと照らし出された机の上に、私の鍵の束は、厳然とのっている。私はくずれるように椅子に坐って、しばらくの間、その鍵の束を見詰めていた。

友人のヘーベルス君の家を訪ねたとき、彼の二年生になるクリストフが「先生がドイツに来て、何が一番困りましたか」とたずねたのに対し、私は即座に「鍵です。鍵を使う生活です」と答えたことを思いだす。クリストフは「何故？」ときき返した。「だって、私ども日本の生活では、こんなに鍵を使わないもの」と私が言うと「どうして鍵を使わないの、それで泥棒が入らないの？」と彼は目を丸くしている。



「そりゃ、泥棒が入るさ？」

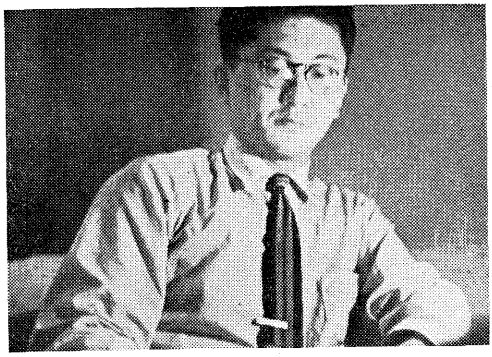
「じゃあ、なぜ鍵を使わないの？」

私には、適当な答えがみつからなかった。困ったようにしていると、ヘーベルス君が、

「クリストフは、是非一度日本へいきたいといっているのですよ」と、とりなすようにいってくれた。

「僕、日本へいくときには、鍵と錠前とを持っていくよ」と、クリストフは、なおも鍵のことにこだわっていた。

こうした鍵は、子どもたちには渡されていない。遊びに夢中になって落したりなくしたりするおそれがあるからであろう。幼稚園や学校から子どもが帰ってくると、門の脇にあるボタンを押して「ビビー」という音を待つのである。従って、その時間には母親または家人が家にいなければならない。もし、何かの用事があって無人の時



は、「ビビー」と鳴らない門の前に立って、子どもたちは寒さを身に受けなければならないのである。寒さは、子どもにとっても遠慮なく泌み込む。そんなとき子どもたちはどこかに寄り道をする恐れがある。殊にドイツには、働いている母親が多いから、子どもを一人で帰すことが出来ない。そこで、保育所(保育所もキンダーガルテンという)とかホルト(放課後学校)の組織を利用するわけである。そうした組織は、市または州の政治が子どもを守るためにしっかりと作っている。

しかし、鍵を使う生活をしてみて私に感ぜられたのは「家」というものに対する感じのちがいである。日本の子どもたちは、あるかなしかの門をくぐり、玄関の戸をガラッとあければ、そこに母親の顔が待っているのをみつけるであろう。母親の顔がない時には「お母さん、唯今!」を大きな声で叫びさえすれば、母親が家にいる限りは、どこからか「お帰り」ということばがかかるであろう。"at home"とはまさにこのような瞬間を言いたいことばである。「唯今!」「お帰り」の会話は、欧米のことばに翻訳することが出来ない。この会話の持つ味は、家族制度が変っても、国家の形が変っても、残しておきたいものだと思う。

六年前、シドニーでおこなわれた「精神衛生」の会議でも、子どもが幼稚園・学校から帰って来たときの受入れ態勢についての論議があった。帰宅した時に、家族の誰かが、殊に母親が迎えてくれない時の子どもの心には、傷が大きいことが言われた。そして迎えることが出来ない家庭に対して、どのような対策が必要かということが、話し合われたのである。

こうして、ドイツでの生活を経験してみると、家庭とか、その中で営まれる親子関係とかに、家屋の造りであるとか、あるいはその運営の仕方が、大きな力を持っていることに気付いた。こうした問題は、実は文化人類学者たちが研究の歩みを進めているのであるが、「鍵」一つにしても、子どもの心にかなり大きな影響を与えていることに気付いたのである。

ドイツの二月は、寒さの厳しい季節である。大学へいく十五分の道を、私は一と息に行きつくことが出来ず、耳や手足のこごえをほぐすために、路傍の郵便局に入って、そこの煖房に親しんだのを今もなお思い起す。それとともに、鉄門の前に立って、家の中からの反応を待っているドイツの子どもたちの姿も、脳裏からにじみ出るように、眼底にうつり映えるのである。

幼児のボール遊びの教育的意義とその指導法

岡本卓夫

筆者は、過去数回にわたって、幼児のボール遊びに関する諸種の実験観察や、その結果に基づくボール遊びの実際について本誌に発表してきたが、今回は、ボール遊びが幼児にとって、どんな教育的意義あるいは価値をもっておるか、その指導はどんなにすればよいのかということについてかいてみたい。

教育的意義あるいは価値

一、身体的価値

ボール遊びは、いうまでもなく大筋肉活動（Bigmuscle activities）に依存する活潑な経験で、彼らは、ボールを道具として、主として彼らの身体的運動的機能を楽しみ、その過程において、彼らの身体的、運動的発達が促進される。すなわち、〝その日々の活動を、単に容易にやってのけるというだけでなく、能率的に楽しくなし遂げ、疲労せず、なお、精力の余裕をもってなす〟という、いわゆるラ・ザール（D. La Salle）のダイナミックな健康の資質が獲得される。この資質を分析的に筋力、持久力、身体支配力の三つに分けてのべると、

1. 筋　力

ボール遊びは、投げる、打つ、蹴る、転がすなどの運動が主軸となる運動量の大きな全身的な運動である。したがって、この遊びにおいて、子どもは、かかる運動を反復練習し、おのずから腕、脚、胸部はもちろん全身の筋力を発達せしめる。

2. 持　久　力

ボールの誘引力はきわめて大きく、幼児は、その遊びにひじょうな興味をもつ。興味ある遊びには、子どもは熱中し、しかも長時間続けて、心的飽和をきたさない。

かように、ボール遊びは、興味のうちに、運動量の大きな全身運

動が長く続けられ、子どもは、知らず知らずの間に、身体的な持久力を獲得してゆく。

3. 身体支配力

ボール遊びは、変転自在なボールを操作する遊びなので、ボールに対し、絶えず全身を適応させてゆかねばならない。例えば、投球においては、どんなに構え、どの方向に、どれくらいの力で投げるか。それをキャッチするには、どっちへ動いて、腕を、脚を、どんなにし、どんなに構えるか。蹴るには、上体を、手をどんなにし、脚はどのように振ったらよいかなどなど。変化きわまりない種々なる事態において、手足を、そして全身を、好妙に適応させてゆかねばならない。

かように、彼らは、活潑な遊び、楽しい活動の中に、おのずから身体支配力を獲得し、無駄のない能率的な活動・動作をつくりあげてゆく。子どもの日常生活に頻発する多くの怪我や事故は、おおむね、彼らの不器用な、幼稚な身体支配にその原因がある。これら突発事故から彼らの身体を守るためにも、ボール遊びのもつ意義はきわめて大きい。

二、社会的価値

子どもは、その家庭に生れ、その家族の成員として成長する。だが長ずるとともに、家庭社会の外に、子どもたちだけの社会を形成するようになり、今まで依存していた親たちから離れて、しだいに友人との関係を密にし、他の子どもとともに何かをなすことを求めるようになる。保育所や幼稚園への入園は、このような社会への転機となる。幼稚園や保育所が、彼らのこの要求を満足させ、社会性の芽生えを助成してやることは、きわめて大切な使命といえよう。

この使命を果すボールこそは、最もすぐれた遊具といえよう。なぜならば、すべり台、ぶらんこ、砂遊びなどは、いずれも個人的な遊びで、平行遊び (Parallel play) や連合遊び (Associative play) としての役割は果しえても、大ぜいで、協同して遊ぶための道具とはなりえない。だが、ボールは、本来的に、協同遊び (Organization supplementary play) としての遊具であり、みんなで団体的に遊ぶところにその妙味がある。

したがって、ボール遊びにおいては、子どもは、一個のボールで、みんなが平等に仲よく遊ぶためには、どんな遊びを、どんな方法でやったらよいか。それには、どんな約束が必要か。また、自分たちのグループが勝つためには、どうしたらよいかなどの事態に当面する。彼らは、かようなさまざまの事態の経験を通して、しだいに自己中心的傾向から脱脚し、他の子どもの立場を尊重し、みんなと一しょに考え、互に協力するという社会性の芽生えが育成される。

三、情緒的価値

子どもは、幼稚園や保育所にはいって、はじめて、広い園舎や遊び場、そして親しみなれない多くの子どもに接する。そこには、新

しい環境の圧力に圧倒されて、ちぢこまっている子ども、きかぬ気のあばれん坊にいじめられ、泣いてばかりいる子どもなど、彼らの情緒はいちじるしくかく乱される。かかる事態の解消や予防のために、ボール遊びは、きわめて有効な手段となる。例えば、前記のような、ちじこまっておる子どもに、ボール一個を与えてやると、彼は、ひとりで手まりしたり、投げたり、転がしたりなどして遊び、そのうちに、この遊びに熱中して、おのずから環境の圧力から解放され、その情緒は安定化する。

四、知的価値

多くの教師や親たちは、子どもの知的能力は、絵をかいたり積木をしたり、あるいは絵本、童話、紙芝居などを見ることによってえられるものと考えている。だが、知的発達はそんなことだけでじゅうぶんにおこなわれるものではない。それの基盤を培い、彼らのより完全な知的発達を期待するには、どうしても、彼らの生活の大かたを占める身体的遊びの中に、その手を差しのべねばならない。ボール遊びは、かような面から、彼らの知的発達を助成するのに有効な手段となる。例えば、〃手まりつき〃では何回ついたら交代するか、〃紅白球入れ〃では、球が何個籠に入ったか、〃ボールあて遊び〃では、どちらの組が幾つ多くあてたかなど、遊びの中に数観念のゆたかな基盤が培われる。

かくの如く、ボール遊びは、身体的にはもちろん、社会的、情緒的、知的など多方面にわたって、これが教育的価値はきわめて大というべきであろう。

さらに、ボール遊びは、前述の如く、子どもにはひじょうに興味ある活潑な活動であり、かつ集団的な遊びであるから、彼らはこれに夢中となり、自分自身を素直にさらけだす。それゆえ、他の経験においては、とうてい見られない人格指導の場が容易に展開される。

かく考えると、ボール遊びは、幼稚園や保育所の欠くべからざる指導内容となる。したがって、この遊びは、今後の幼稚園や保育所の指導においては、最高度に活用されなくてはならない。

指　導　法

では、これが指導はどのようにしたらよいか。それは、

一、幼稚園教育の目的を考えて

ボール遊びの指導は、単に遊びのために遊ばすのではなく、この遊びを通して、学校教育法第七八条に示される幼稚園教育の目標を達成しようとするにある。したがって、これが指導は、まずそれらの目標に合致するよう立案されなくてはならない。

1. 健康、安全で幸福な生活のために必要な日常の習慣を養い、

身体諸機能の調和的発達を図ること。例えば、ボール遊びのあと、よごれた手足や顔をきれいにさせるなど。

2. 園内において、集団生活を経験させ、よろこんでこれに参加する態度と協同、自主及び自律の精神の芽生えを養うこと。例えば、ボールを独占するようなわがままな子どもがいたら、これをたしなめ、孤独の子どもはこれを鼓舞して参加させ、みんなが仲よく遊ぶようにさせるなど。

3. 身辺の社会生活及び事象に対する正しい理解と態度の芽生えを養うこと。例えば、投捕球において、相手やボールの遠近・方向・高低・位置・速度などに注意して遊ばせるなど。

4. 言語の使い方を正しく導き、童話、絵本などに対する興味を養うこと。例えば、遊びに夢中になると、子どもは乱ぼうなことばづかいをしがちである。そういう機会をとらえ、つねに正しいことばづかいをするよう指導するなど。

5. 音楽、遊戯、絵画その他の方法により、創作的表現に対する興味を養うこと。例えば、リズムの強弱により、手まりのつき方をいろいろ工夫し表現させるなど。

二、個々の子どもの発達を考えて

〃鉄は熱いうちにきたえよ〃 という。いまよく伸びつつあるものは、赤熱した鉄のようなもの、この時期を失せず、適切な教材で、正しく指導すれば、子どもはぐんぐん伸びてゆく。〃伸びつつあるものは自然に使いたくなる〃どんなことをしたがるか、面白がるかを注意していれば、今どの方面が子どもに伸びているかがよくわかる。大きなボールを、両腕でかかえるようにしてしかキャッチできない子どもに、小さいボールのキャッチを指導することは無理である。ひとり遊びしかできぬ子どもに、いきなりグループ遊びをさせることはできない。同年令の子どもといっても、十人十色であることを忘れてはならない。

三、環境を整えて

学校教育法第七七条に、「幼稚園は、幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。」とあるように、幼児の指導にあたっては、環境整備は特に重要視される。

では、ボール遊びの指導においては、どのような環境を整えたらよいか。ウイリアムス（Williams, J.F）は、〃体育は、個人やグループに、身体的に健全で、精神的に刺激的でかつ満足的、そして社会的に健全であるという場において、活動する機会を提供するところの熟練した指導と、過切な施設を用意することを目的とすべきである〃といっておるが、例えば、日当りがよく、おおぜいで遊んでも自由にやれるだけの安全な広場を設けてやるとか、ボールには空気を一ぱいふくらませ、子どもの運動意欲を誘発するようにしておくとか、あるいは喧嘩なしに、みんなが仲よく遊べるだけの十分なボールを準備しておくことなどは、この趣旨にそった環境整備といえ

よう。

四、小学校との関連性を考えて

いうまでもなく、幼稚園では、その指導の結果が、おのずから小学校教育に関連し連結するよう指導されなくてはならない。そのためには、例えば、小学校低学年のボール遊びの単元計画を研究して指導計画を立て、あるいはその遊びを子どもに参観させたりする、など。

五、次にボール遊びの実際指導においてどんな態度や注意が必要かについて考えるに、

(一) 最初から一定の指導形態を決めて指導しないようにする。

指導というと、ただちに小学校のそれを連想して、一定の指導形態が考えられがちであるが、幼稚園や保育所におけるボール遊びの指導は、彼らの自由なボー遊びに、体育的角度から指導の手を差しのべようというので、ある場合にはひとり遊びの子どもに、またある場合にはグループ遊びの子どもにというぐあいに、それぞれの場に応じて、臨機応変の指導形態をとり、最初から一定の指導形態をきめてかかってはならない。

(二) 子どもとともに、遊びつつ指導する。

次に指導にあたっては、なれなれしい態度で子どもに近づき、〝Aちゃん、先生も仲間に入れてほしいわ〟というぐあいに、子どもと平等の立場で仲間入りし、ともに遊びを楽しむというふん囲気のもとにはじめる。

(三) 遊びの内容を速かにキャッチし、その流れにしたがいつつ指導する。

一しょに遊んでいる間に、いったいこの子らは何をして遊ぼうとしているのか、その内容を速かに探知する。遊びの内容がわかったら、その流れにしたがって、適切な示唆や暗示を与え、彼らの自主性を生かしつつ、徐々に望ましいボール遊びに誘導してゆく。

(四) あと始末をさせる。

遊びが終ったら、そのとき使ったボールや他の用具類を、きちんともとの場所へしまわせ、それができたら、手足、顔などをきれいにぬぐわせ、健康に関するよい習慣をもつよう指導する。

—了—

* * * *

幼児の笑いの表情について

川原田恭子

序

笑いの表情、すなわち快のあらわれは、いろいろな場合に起りやすい。そして、単なる快から、喜び・得意などの情緒が分化する。すなわち快の情緒もまた、他とともに発達にともなう分化が見られるので、子どもの持っているいろいろの欲求の満足ということに、深いつながりを持っていると思われる。私は、笑いの表情をとらえて、その原因などを調べたいと思う。

一、問題選たく（原因など）

今、ここにAとして登場させる子どもは、尚綱幼稚園に来て二年目の子どもである。Aは姉二人と姉の友だちとで遊んでおり、私ももちろんそこにいて、一しょに遊びつつの観察である。

(イ) 友だちの悪口を云いながらの笑い。

これは姉たちが離れて私と二人だけになった時であるが、そこから考えてこの笑いの原因は、遊びの中で楽しくて笑ったのでは決してない。ジャスティンは、笑いの条件として六つの原理を上げているが、もしもそれにあてはめるならば、第二の「自分よりすぐれている人が失敗する」に入るのでないだろうか。すなわち、悪口を云って、相手の自分より下であることに優越感を感じたことが原因だと思う。

(ロ) 一人ごとを云いながら浮べた微笑

明らかにこれは、Aが何かを想像して、それに話しかける想像の遊戯であり、Aが心から楽しく遊んでいるための笑いであろう。

(ハ) 悪口を云った相手に話しながらの笑い。(イで悪口を云った相手である)

ジャスティンによれば、第四の社交的微笑であろう。悪口を云った相手に笑いながら話しかけられて、Aも笑いながら答えたのである。しかし、この場合Aが、その友だちを憎く思いながら答えたのだとは思われない。何故なら、子どもたちには心から人を憎んだりすることは出来ないはずである。とすれば、イの場合も、単にそのとき思ったことを口に出したに過ぎないであろう。

(ニ) 汽車の窓、あるいは犬などに手をふりながらの笑い。

これも、口とどうよう遊びの中での楽しさから来るものと思われ、Aが楽しく遊んでいることになる。

二、発展状態及び発展原因

(イ) 悪口を云い終ったあと、すぐに笑いの表情は消え、無表情となった。悪口を云ったので悪いと思ったか、あるいは、Aが悪口を私に向って云ったのに対して私が無言だったので、笑いをやめたか、どちらかに考えられる。

(ロ) だいぶ長くその状態が続き、一人でしゃべっていたが、Aの母が来て話しかけた

ので、今までの笑いは消え、さらに大きな微笑が広がった。自分自身の遊びから、母が持って来たオヤツに心をとらわれたのが原因であろう。

㈥ 笑いながら話していた表情は消え、少し怒りの表情になった。話している間に、相手が、Aの意見に反対したのである。しかし、怒りの表情もすぐに消え、続いて笑いながら私に話しかけたのである。たいして気にさわらなかった故であろうが、この少しばかりの怒りの表情も、交社的にあらわれたと見ることが出来るであろう。

㈢ 外に遊びに行っての帰り道、通りかかるものに何でも話しかけ微笑は消えない。手をつないで歩くのが楽しいらしいが、その微笑が恐怖に変る。二匹の犬がすさまじい勢いでけんかをしていたのを見つけたのである。たぶん、おそろしさがさきになり、微笑が消え去ったものと思われる。

三、見　解

笑いはどの情緒かをきめることがむずかしいと一般に云われている。私自身も問題を選んで見て、むずかしいことに気づいたのである。一番簡単に見えて、一番むずかしいのではないだろうか。笑いの状態がはっきりつかめないばかりか、変りやすいので、問題としては失敗であったかも知れないと思う。

笑いは、乳児における生理的な刺戟が一番低く、感覚的運動的刺戟が笑いをおこす刺戟として次に加わり、さらに社会的な刺戟が条件となってくる。Aの場合も、この三つに限定してあてはめて見るならば、1、㈠は社会的条件による笑いであり、2、㈡には感覚的運動的条件による笑いとなる。おとなにおいては、その大部分が社会的笑いであるように、子どももその成長に従って社会的笑いが大きな位置をしめるようになるのであろう。幼稚園児に、私たちが話しかけた場合、笑うのも、幼稚園で、人との交渉が早くからなされている為であろう。ジャスティンは、一般的な事からもっと進んで、笑いを起す条件として六つの原理を上げているが、私はこれだけでは不十分だと思わずにはいられない。何故なら、五六歳の子どもはもっといろいろの場合に笑いをおこすであろうから。もちろん原理であるから、すべてがこれにあてはまるということはないが、Aの場合をジャスティンにあてはめるならば、前記の如く、㈠は第二に㈡は第六、ハは第四、㈡はふたたび六、ということになるであろう。

子どもの喜びと笑いは、子どもの欲求や満足につながっていると思われる。ことに年齢の少ない子どもはそうであろう。よく、子どもの笑顔を見たいばかりに物を買って与えたり、いろいろ刺戟を与えたりするが、いけないことだと思う。子どもは落着きなく、刺戟を与えなければ何もしないということにもなりかねないであろう。笑いの大きな問題は、欲求の満足のさせ方にあるのではないだろうか。また、年齢が大きくなると、いろいろ社交的なことで笑うが、その導きかたも考えねばならない大きな問題であろう。

（尚絅短大保育科学生）

幼児の質問の扱いについて

吉野美智

子どもの質問――まったく単純です。しかし私たちおとなは、たびたびこの単純な質問に窮し、その場をごまかしてしまう。ことがあります。単純な人間ほど扱いやすくもあり、扱いにくくもあるのです。

相手が単純な子どもであるので、当然その答もわかりやすく〝単純さ〟が要求されます。子どもの質問は、その急所をついていて、自分の納得のゆくまではげしく追求する。子どもの質問も年齢・性格・知能・生活環境などによって違ってくるし、その答も当然それらによって違ってくるでしょう。子どもは一度教えられたことは、相当大きくなるまでそう思いこみ、おとなになっても一生、心のどこかに宿ってると思います。だから教えるおとなも相当責任を持たねばなりません。相手は小さい子どものその場限りの質問などと言って無責任な答え方をすると、ここにおいて、おとなの答が問題になってきます。その答が子どもの性質に将来に非常な影響を及ぼします。子どもはおとなを信頼し、必ず自分の質問には解答を与えてくれるものと思っているのです。

子どもがとくに一しょに毎日生活してる人たちに対して質問し〝うるさい！〟とばかり言われていたらどうだろう。子どもはその後何に対しても追求する心が失われ、何事にもあきやすい人間になってしまうでしょう。子どもが質問してる時の顔は真剣そのものです。子どもの心はそれにのみ奪われます。子どもの質問に対して〝そんなことといいから外で遊びなさい！〟などと云っても、子どもは言うことをききません。ある程度（小学一年位）大きくなると子どもは、だいたいのことは解っていても、それをはっきりさせるために質問するのであるが、子どもが質問するのは全然わからないから質問するのです。では子どもの質問例を上げてみましょう。私の家にも子どもがいないし近所でも子どもに接する機会がありませんが、時々遊びにくる私のいとこについて例を述べてみます。（男子・満三年九ヵ月・今春四月より幼稚園）

例一、先日、昼食後、お湯の入った茶わんにハシを入れていたずらしていたが、不意に、

子「ハシがまがっちゃった……」と泣きべそ、

私「ハシをお湯から出してごらんなさい。ネーまっすぐでしょう。今度は入れてごらんなさい。あっ！まがっちゃった。水の中へ入れるとまがってみえるのよ。」

子どもは解ったような解らないような顔をしてはしを入れたり、出したりしていたが、すっかりおもしろくなったとみえ、ニコニコとさかんに出したり入れたりしている。でもまだ〝どうしてまがって見えるの？〟とは質問しなかった。私は彼がよく目にとめてくれたとうれしかった。

例二、動物たちと自分の相違

(1)ある日、野原へ連れて行った。山羊が草を食べていました。

子「どうして草ばかり食べるの？　このおにぎりヤギに食べさせようか。」

私「ダメダメ、山羊はおにぎり食べないのよ」

私は山羊は肉や魚は本当に食べないのかな？　と自問してみておかしくなった。

(2)犬や猫が手をつかわず口だけで食事をしているのをみて、

子「どうして口だけでたべるの？」とまねだした。

私「そんなことをすると犬になっちゃうのよ！よしなさい！」

彼は真剣な顔をして犬になってしまうのではないかと心配顔。私ははっとして急いで、

私「犬にならないから大丈夫よ。犬はね、ああして食べるのが一番食べやすいのよ。坊やはおはしで食べるのがいいでしょう。」

彼はおとなしく、うなずいてはしをとって食べはじめた。

犬猫が四つ足で歩くのをみて、

子「どうして僕のように立って歩かないの？」

私「四本足の方が歩きやすいから。」

(3)飛ぶ鳥をみて、

子「どうして鳥には羽があって僕にはないの？」

私「鳥は小さいから道を歩いているとバスやハイヤーに引かれちやうのよ。だからお空を飛ぶのよ。」

例三、先日彼の妹が生れました。お母さんが病院から赤ん坊をつれて帰宅しました。

子「この子どっから持ってきたの？」

母「よそからもらってきたのよ」

私は考えた。よそからもらってきたと教えられたこの子は大きくなるまでそう思うに違いない。最も信頼している母親から教えられたのだから。そこで私は子どもの時に私の母から教えられたように「坊や、この子は坊やと同じようにお母さんのお腹から出てきたのよ。だから坊やの妹なの。いじめてはだめよ、うんとかわいかわいするのよね、わかった？」

例四、電信電話機について

(1)私がラジオのダイヤルを廻していると側にきて「やらして」と言う。ダイヤルを廻してると第一、第二、東北放送と次々に出てくる。

子「ここまわすと、どうして違うとこ出てくるの、どこで唯がしゃべっているの？」

私「放送局でね、おじさんがしゃべったのがこの線を通してきこえてくるのよ。」

坊やはそれ以上質問しなかった。今では坊やは一人でラジオをかけられる。

(2)私がレコードをかけていると、

子「どうしてきこえるの？　どこでうたっているの？」

私「……（窮する）レコードから声が出てくるの…。」

子「……」けげんそうな顔。私は子どもの時〝この箱の中に小人が入って歌っている〟と教えられ、唯もいない時そっと中を調べてレコードを割って叱られた思い出がある。まったく子どもの質問は難しいものです。以上〝質問について〟以外のくだらないことを述べましたが、これからも子どもの質問・その返答を研究したいと思います。

（尚絅短大保育科学生）

拝啓　皆様がたにはますます御健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、昭和三十年四月倉橋惣三氏が他界されましたにつきましては、氏の幼児教育界に残された業蹟を末永く記念いたしたいとの念願より私ども相はかり、お茶の水女子大学の図書館内に倉橋文庫寄贈の企てをいたしましたところ、幸い多数の皆様がたの御賛同を得、多額の御拠金を頂きまして、誠にありがとうございました。

このほど整理を終り、十二月十九日にお茶の水女子大学に倉橋文庫の図書として寄附の手続きを完了いたしました。ここに会計の報告を申し上げますと同時に、皆様の御協力に対して衷心より厚く御礼を申し上げます。

昭和三十二年十二月十九日

倉橋文庫寄贈実行委員

及川ふみ・津守　真・菊池ふじの
山村きよ・大熊米子・入江ヤス
小野和鹿・小菅利雄・御木本美隆

会計報告

一、収　入　御寄付金　三八四、三七〇円
　　貯金利子　一五、六三〇円
一、支　出　倉橋文庫（図書費）　四〇〇、〇〇〇円
　　差引残額なし

（事務費其の他は日本幼稚園協会が負担いたしました）

倉橋文庫協力者御芳名

〔到着順〕

金額　御芳名

一金　一〇〇、〇〇〇円也　日本幼稚園協会

一金　六一、五〇〇円也　みどり会

（八木沢志げ・鎌田志ん・黒田光子・山村きよ・青柳節子・徳久孝・市橋とし子・草野京子・昭和十一年卒業生一同・原田春子・熊井嘉鶴子・丸岡美智子・三田直子・川崎千束・高間富子・竹中京子・立野ミエ・豊田いと・藤沢　寿・丸山　静・高須賀三甫子・大熊よね・木口　秀・富田久・松村光子・諸戸節子・小林正子・林　成子・宮崎その・清水光子・神足たよ・日比野けい子・沼館正尾・八坂富子・玉川喜代子・一法師和歌枝・宮崎能布・小山花子・平井英子・和泉屋雅子・井口登美子・岩村安子・田中逸子・志田こと・堀田茂兎・掃部関多可・山本美代子・広野まさ・増田貞子・村井トミ・堀合文子・大杉恵美・高田典子・伴　礼子・小野沢由美子・岡　信子・飯島富久子・河田信子・菊池明子・遠藤英子・高木明子・海野滋子・星野たづ子・坂田義子・吉野弘子・吉岡久子・宇山伊豆江・入谷雅子・小山田節

・清水敏江・元木正子・小野明子・朝倉泰子・鶴巻あい・桑原久子・谷野恵美子・越智京子・表　行子・大田八重・乙黒美津雄・長岡文子・深沢好子・森田貞子・新井ツヤ・金谷美代・宮川せい・小林敦子・山田あき・小原寿子・高山賀千子・大島慶子・岡山貴美子・平戸順子・鈴木　恵・平井りう子・中山郷子・久保啓子・平川静江・渡辺祝子・工藤栄子・金子房子・富樫純子・河井多喜子・丹下洋子・市来崎愛子・荘田美奈子・高柳幸子・梅原百合子・石田喜美・原田愛子・永井黎子・向井和子・小島孝子・木村福子・大内　至・富田和子・大島恒子・近藤なほゑ・黒田フミ・中村実枝・三宅貞子・片岡たまえ・根本勝子・岩崎　香・羽生京・池田フサ・高橋芳子・松本睦子・大内寿子・浅野道子・木幡まさ・沖　朱子・藤城雅子・甲斐田徳枝・宮原恭子・熊田多賀子・四野宮茂登・野村すず子・富田富佐子・園田恵子・巌谷たま・秋田好枝・白井三和子・小林淑子・服部田鶴子・雁部節子・永山暁美・貞弘満里子・吉田シゲ子・浅井徳子・藤沢以佐子・秋山美枝子・藤井幸子・谷口アツ・倉石鞏子・小幡知子・石井信子・無名子・佐藤満寿・加藤知子・野口裕子・日向房子・坂田ゆき・細井妙子・葛田恭子・米山澄江・丸杉澄子・並木クニ・平野陽子・金沢寿子・丸山美代子・望月靖子・三浦光代・大野貞子・稲葉房子・谷口　緑・川村みどり・古牧弥生・松岡浜路・吉田陽子・伊東桜子・奥井淳子・近藤成子・土橋徳子・手塚幸子・永島恵美子・藤山泰子・武田光代・由良　環・市川美保子・沼川松枝・石川サイ・高木良子・杉山きく・森美津子・堀川泰子・尾崎啓子・小川文子・長谷川晴・平野澄子・桑田光子）

一金　二、三〇〇円也　昭和二十五年三月幼稚園修了者有志

（磯村健二・福田収一・島田啓作・佐竹　誠・石井　治・横山恵子・石昭義・仲孜・堀江妙子・林千鶴子・福本道子・今泉忠子・安藤洋子・並木幸子・川田泰子・高島洋子・堀越寛子・浦田温子・吉倉弘子・木口聰子・村橋千枝子・右田照子・谷崎豊）

一金　一、一〇〇円也　昭和十二年三月幼稚園修了者有志

（和久本芳彦・小山泰雄・佐藤博美・松井秀行・三浦幹男・田村　晃・国沢泰彦・高橋　務・山中羊吾・浅岡正雄・松井祐子）

一金　五、三〇〇円也　幼稚園修了者有志

（砂山恵津子・岩崎貞子・石岡カオリ・川上　竜・湯本みち子・上小沢澄子・高木憲治・加賀美裕子・青木節子・八杉佑利子・柳下和子・高瀬幸子・川上　賢・福永峰子・神宮幸子・南部玖美子・諸井行子・古沢洋子・小野和鹿・野村佳世・入江洋子・小野田由美・中根美穂子・森口キヨ子・森口ヤス子・磯田タエ子・大岩一・原ヒサ子・橋本あや子・橋本マサ子・岡山林太郎・松原雅子・佐藤正治・石井正則・日比野輝・今井道彦・五十嵐紀子・五十嵐永子・吉良いく子・浅岡なお子・浅岡たか子・有賀正弘・大坪英司・京戸弘文・鳩山勝郎・大川恵子・金井淑・郡真子・渡辺真佐美・山中止志郎・青山裕子・内海絢子・柏木操子・小野由紀子・稲村玲子・松本愛也・吉田光枝・本山高久・谷展宏・倉持正昭・種子田武隆・並木喜代子・川畑昌子・狩野爽子・鈴江佑子・鷲田夏栄・山本日出予・浜田元子・岡安敏子・安斎洋子・秋山宣夫）

一金　一、〇〇〇円也　昭和八年幼稚園修了者有志

（北代礼一郎・上田澄子・堤喜久子・奥田睦子・和辻雅子・田島美喜・池上園子・服部小枝子・渋谷百合子・有賀宗子・

一金　四、〇〇〇円也　昭和二十三年幼稚園修了者有志

一金　二、〇〇〇円也　広島県幼稚園協会

一金　五〇〇円也　阿部　昌子
一金　二〇〇円也　西村　ちゑ
一金　五〇〇円也　羽生　京
一金　一〇〇円也　杉浦　真美
同　清水　淳
一金　二〇〇円也　芦谷　秋子
一金　五〇〇円也　大崎　静子
一金　三〇〇円也　高崎市三山幼稚園
同　進藤　葆子
一金　一〇〇円也　飯島　義子
同　島　美代
同　安川　キエ
長山シツカ
同　藤山美津子
稲毛すみれ幼稚園
同　鈴木　和子
一金　二〇〇円也　村雲　ゑよ
一金　二七〇円也　有　志
一金　二〇〇円也　奥井　久子
一金　一、〇〇〇円也　岡山大学付属幼稚園
同　鹿児島大学付属幼稚園
同　鳴戸市幼稚園部会
同　岡山県玉野幼稚園
同　静岡市立安東幼稚園
一金　五〇〇円也　静岡県掛川市立掛川幼稚園
一金　一、〇〇〇円也　岐阜市立加納幼稚園
同　大阪府池田市立池田幼稚園
一金　三〇〇円也　岩手県岩谷堂幼稚園

伊藤トモエ
一金　一、三五〇円也　園長会出席者有志
一金　五、〇〇〇円也　熊本県幼稚園連盟会
一金　二、〇〇〇円也　高田市立高田幼稚園職員一同
一金　二〇、〇〇〇円也　大阪幼稚園協会
一金　一〇、〇〇〇円也　京都府幼稚園連合会
一金　一〇〇円也　大橋　富貴
同　深山　かつ
一金　二〇〇円也　天井　陸三
一金　一、〇〇〇円也　稲村　テイ
同　木村ふみ・木村一子
野間　トヨ
一金　三〇〇円也　桜井　秋男
一金　五、〇〇〇円也　及川　ふみ
一金　二〇〇円也　藤川富士子
一金　五〇〇円也　竹内　和子
一金　一、〇〇〇円也　林　太郎
一金　三、〇〇〇円也　小菅　利雄
一金　一、五〇〇円也　有　志
一金　一、〇〇〇円也　成田　順
一金　四〇〇円也　昭和十六年三月幼稚園修了者有志
一金　三〇〇円也　石田　はる
一金　五〇〇円也　柳沢　澄子
一金　三、〇〇〇円也　菊池フジノ
一金　一〇〇円也　中田　はる
一金　三、〇〇〇円也　横田　国子
一金　二〇〇円也　山脇芙美子

一金　一〇〇円也　野口　和子
一金　五〇〇円也　斎藤　嘉門
同　村田　修子
同　堀合　文子
同　村井　トミ
同　佐々木淑子
同　関　治子
同　富樫　純子
同　村石　京子
一金　一〇〇円也　藤井　令子
同　浜波　孝子
同　村上須美子
同　空河内チズヨ
一金　三〇〇円也　木村　都
一金　二〇〇円也　坂内　ミツ
同　坂内　丹
一金　一〇〇円也　坂内　功
一金　三〇〇円也　小寺　信子
同　亀高　京子
一金　一〇〇円也　松本　宏子
同　石井　亜夫
同　太田　辰子
同　金子　敬三
同　高橋　富美
同　伊藤五月美
同　山本ミエ子
一金　五〇〇円也　麻生　縫
同　松尾　賢俊
同　小島　文雄
一金　一〇〇円也　松岡　益美
同　宝子丸節子

同　高橋　享
同　横手三重子
同　萩本　和子
同　藤原　謙一
同　重信スミエ
同　重信智恵子
同　山川キミコ
同　魚本　徳造
同　正畑　総子
同　正畑　定彦
同　平山　敬子
同　平田　秀子
同　竹田多喜子
同　越智　正孝
同　越智　芳子
一金　五〇〇円也　林　登美枝
一金　一〇〇円也　細川　義城
同　竹本　正人
一金　五〇〇円也　利島　勝進
一金　一〇〇円也　緒方　梅香
一金　三〇〇円也　中桐　美春
一金　一〇〇円也　広常　君子
一金　五〇〇円也　岡山市立深抵幼稚園
同　岡山市立三勲幼稚園
一金　一〇〇円也　岡山県玉野市立日比幼稚園
一金　二〇〇円也　岡山県児島市立小川幼稚園
同　宮内　七三
一金　五〇円也　大倉　出穂
一金　一〇〇円也　岡山県津山保育園
同　岡山県津山市立中央幼稚園
一金　三〇〇円也　岡山市立旭東幼稚園
一金　五〇〇円也　倉敷市御国幼稚園
一金　一〇〇円也　岡山市立大野幼稚園
一金　五〇〇円也　岡山市立内山下幼稚園
一金　一〇〇円也　岡山市宇野幼稚園
一金　二〇〇円也　岡山市福浜幼稚園
一金　五〇〇円也　岡山市立伊島幼稚園
一金　三〇〇円也　宮本　杏子
一金　三、〇〇〇円也　新庄よしこ
一金　一〇〇円也　片岡　勝蔵
同　高橋　芳恵
同　松浦　和子
同　森本　都
一金　五、〇〇〇円也　兵庫県公立幼稚園連合会
同　兵庫県私立幼稚園連合会
一金　一、五〇〇円也　昭和二十六年幼稚園修了者有志
一金　三〇〇円也　松元　文子
一金　一〇〇円也　宮地　忠継
同　宮地　隆夫
同　宮地　伸代
同　網　祐次
一金　一、〇〇〇円也　安村　ふさ
一金　三〇〇円也　飯田　東吾
一金　五〇〇円也　多賀谷景尚
同　宮内重太郎
同　藤井　義水
一金　一〇〇円也　寺崎　久恵
同　藤井百々枝
同　頼　桃三郎
同　高下　正人
同　八坂　富子
同　宮崎　能布
同　豊松喜久美
一金　五〇〇円也　池田　勝人
同　月下　儀平
一金　二〇〇円也　中村　実成
一金　一〇〇円也　脇坂　義人
同　徳永　勝一
同　山形寿恵子
一金　二〇〇円也　松井スズ子
一金　一〇〇円也　高下　勝
一金　五〇〇円也　登世岡界雄
一金　一〇〇円也　川本キヨ子
同　長谷川今枝
同　井上レイ子
同　福田　京子
同　豊原　照
同　藤井　愛乃
同　坂本　忠
同　楠本　厚子
同　堀内美智子
同　塔野　真江
同　河中　雪子
一金　五〇〇円也　徳良　貞代
一金　一、〇〇〇円也　三重大学付属幼稚園
同　上沢　謙二
同　小川　正通
一金　六、五〇〇円也　長崎県幼稚園連合

一金　一、〇〇〇円也　蠟山　政道
一金　五〇〇円也　森　悌次郎
一金　二〇〇円也　林　厳
同　石山　平作
一金　五〇〇円也　薗田　誠一
一金　一、〇〇〇円也　石川　謙
同　波多野完治
同　周郷　博
一金　五〇〇円也　吉田　昇
同　岩崎　喜一
一金　一、〇〇〇円也　戸倉　ハル
一金　五〇〇円也　小泉三枝子
同　守田　貞勝
同　遠見　豊子
一金　二、〇〇〇円也　堀　七蔵
一金　一、五〇〇円也　西本修・西本美節
一金　一、〇〇〇円也　明治四十四年付属高等女学校卒業生一同
一金　一〇〇円也　石川マツエ
同　三文字千枝子
同　奈倉　博子
同　稲田　和子
同　原　倭子
同　浅井　てい
同　岡田　英子
同　谷田　秀子
同　藤島　英子
同　山野　冨子
同　萩原登代子
同　斎藤　淑子

同　近藤　いね
同　坂口冨喜子
一金　一〇〇〇円也　熊野御堂光子
同　大正八年付属高等女学校甲乙組卒業生有志
同　大正十五年付属高等女学校甲乙組卒業生有志
一金　五〇〇円也　桂　和歌子
同　井上　瑞子
一金　一、〇〇〇円也　成毛　典子
一金　一〇〇円也　山本　悦子
同　木藤　道子
同　高橋　正子
同　石井　靖子
同　小川　絢子
同　大島　夏江
同　苫米地治子
一金　三〇〇円也　原田　歌子
一金　一〇〇円也　浜田　恵子
同　山口はる子
同　白木　章恵
同　伊藤　道子
同　糟谷　邦子
一金　一、一〇〇円也　大正十四年付属高等女学校専攻科卒業生有志
同　伊藤須美子
同　佐々川文代
同　斎藤　静江
同　小野寺百合子
同　山本能布子

同　末吉　元子
同　猪谷登き子
同　石渡宇都代
同　小泉　妙子
同　成田　光枝
同　中原主美子
同　志波　絢子
同　西村　範子
同　緑川　きみ
同　広瀬　誠子
同　込　房子
一金　一、〇〇〇円也　大正九年付属高等女学校専攻科二部卒業生有志
一金　二〇〇円也　市河　範子
同　上田　澄子
同　有賀　宗子
同　鈴木　哲子
同　荒井　民子
同　服部小枝子
一金　一〇〇円也　板倉　宏子
同　酒井　淑子
同　奥田　睦子
一金　二〇〇円也　田島　美喜
一金　一〇〇円也　菊池　澄子
一金　二〇〇円也　水之江君子
同　横田　喜美
同　神田　治子
同　田口　彩子
同　菅野　和子
同　酒井　千春

一金　一〇〇円也　滝山百合子
同　管間まつみ
一金　二〇〇円也　辻　礼子
同　黒田千枝子
同　磯田聿子
同　長浜　妙子
一金　一〇〇円也　田中　ゆき
同　岡田　淑子
同　稲森　勇子
同　波多野華子
同　森　光子
同　大森伎余子
同　横地　栄枝
同　岡本嘉代子
同　林　多鶴子
同　田中　洋子
一金　二〇〇円也　吉原　敏子
一金　一〇〇円也　松浦　康子
同　田代　みち
同　郡　貞子
同　亀田　芳
同　野村　純子
同　池田　篤子
同　大塚　玲子
一金　五〇〇円也　高橋　武美
同　茂木　由子
同　昭和四年付属高等女学校乙組卒業生有志
一金　一〇〇円也　石黒　光子
一金　五〇〇円也　小野田なか
一金　二〇〇円也　西村　正俊

一金　一〇〇円也　芦苅トキ子
同　戸田　信子
同　吉田　保美
一金　五〇〇円也　三浦かづよ
一金　三〇〇円也　花井　孝
一金　二〇〇円也　松井　栄一
一金　三、〇〇〇円也　牛島　義友
一金　一、〇〇〇円也　臼田　梅子
一金　一、〇〇〇円也　今城明雄・今城晶
一金　五〇〇円也　後藤いく子
同　石村　縫
一金　一、〇〇〇円也　細井　専
一金　五〇〇円也　守永　英子
一金　一、〇〇〇円也　久米　又三
一金　三〇、〇〇〇円也　フレーベル館
一金　五、〇〇〇円也　小高　竜治
同　並木　幸三
一金　二、〇〇〇円也　津守　真
一金　一五、六三〇円也　貯金利子

計　四〇〇、〇〇〇円也

書籍　御芳名

幼児の教育合本　立野　みえ
（大正十四年以降昭和十九年十二月まで）
幼児の心理的発達　山下　俊郎
一人子の心理と発達
教育的環境学
児童相談
幼児の家庭教育
保育学概説
児童心理学
児童の生活とその指導
改訂幼児心理学

婦人と子ども　進藤　りう
（第一巻より第十八巻まで　百六十三冊）
幼児の教育
（第十九巻より第三十巻まで　百冊）

幼稚園教育の実際　宮内　孝
幼稚園教育要録の実践
改訂幼稚園幼児指導要録の解説

育ての心　日本幼稚園協会
幼稚園雑草
幼稚園真諦
豊田英雄先生の生活

どうでしょう？

飯島日出美

私どもの園では毎月一回宝仙小学校校長の栗山氏をお迎えして、園児に自然科学指導をしていただくことになっている。十一月の材料は「みかん」であった。

その日。

二年保育年少組の園児五十名が、遊戯室に椅子を車座に並べ、先生のお話を聞きながら、匂をかいだり、皮にさわってみたり、上手に皮をむき種は入っていないかしらとしらべてみたり、大喜びでみかんを食べた。子ども達は、何でも、ほんの少しでも、幼稚園でおやつを食べるのが大好きである。

その後、栗山氏が、水の入った金魚鉢を片手に、みかんを一つ片手に、

「さあ　私がいまこの水の中に、みかんを入れます。みかんをこの水の中に入れると、どうなるでしょう。みかんは浮かぶでしょうか？　沈むでしょうか？」

子どもたちは、しんとして考えている。

「さあ　どうでしょう。」

「いけないの。駄目！」

大きな、子どもの答える声。見ると、私の級のA子である。とたんに私は　はっとし、身のすくむ思いがした。A子がこんなふうな突飛な答え方を堂々とした事から、私の日頃の保育に、このような答え方をさせる一つの癖があった事に思い当ったからである。

その日は、私の他、誰もその事に気付かず、いつものように、先生がたを微笑ませただけで無事に終ってしまったが、私にはその日のことが忘れられない。

私のクラスでも、何か約束ごとを決める時、また、何か事件が持ち上った時、子どもたち自身に考えさせるように指導している。先生が「廊下は走らないようにしましょう。走るとお友だちとぶつかった時にたいへんだし、騒がしいでしょう。」と云うより、子どもたち自身その事に思い当った方が約束の効力が大きいと考えられるからである。

そこで　例えば、

「さっき、S子ちゃんが『ブランコに乗りたいんだけど、男のかたが乗せてくれないの』って鉄棒のところで、しょんぼりしていらしたのよ、そんな時どうすればいいかしら。」

「乗せて！　って云えばいいの。」

「そうね。S子ちゃん乗せて！　って云ったの？」

「乗せてって云ってもね、交ってくれないの。」

「そう。お友だちが乗せてって云っても、乗せてあげないのはどうでしょうね。」

「いけないの」

「どうして？」

「だってね、みんなが乗りたいから。」

「ブランコは、幼稚園のものだから。」
「変りばんこに乗らないといけないの」
「そうね。じゃお友だちが沢山乗りたかったら？」
「並んで、数えて乗るの」
「そうね。二十数えて乗るのね。順番にかわりばんこに乗るのね、だけど、もっと、二十よりもっと乗りたかったらどうすればいいかしら？」
「また並んで乗るの」
「そう。じゃこれから、お友だちが乗せてっていらしたら二十数えて交ってあげましょうね。もっと沢山乗りたくても我慢して、また並んで待っていて、それからもう一度乗るのね。お約束しましょうね。」
また製作をする時なども、よく、こうした指導のし方をすることがある。その製作で、子どもが、間違え易い点を予想しておいて、その間違いがどうすれば起るのか、またどうしてそれが間違いであるかを考えさせるのである。
「こんなふうにしたら、どうでしょう？」
「駄目、いけないの」
「どうして？」
「だってね　おかしいから」
と、子どもたちが、間違えないように予防線を張っておくのである。
こうした指導方法は、別に問題となるような間違った指導方法ではないと思う。が私の場合「ことば」に問題があったのである。「ことば」に問題となるような一つの癖があったのである。
第一に、いつも「どうでしょう。」と問いかけたこと、しかも大抵の場合、悪い例、間違った例を取り上げ「どうでしょう」と問いかけたこと、これは、どんなに効果があったとしても避けなければならないことであった。
第二に、その問に対し、子どもたちが「だめ」「いけないの」と答えるのを「どうして？」と問うことによって、其の場其の場では本来の目的を達することが出来ていたにしても「どうでしょう？」に対して、ほとんど決って「いけないの」「だめ」と答えるのを放置していたこと、他の答え方をさせるよう考慮をなさなかったことは指導上の大きな怠慢であったわけである。
「どうでしょう？」
「いけないの」　「だめ」
この二つの問答がいつの間にか子どもたちの頭の中に習慣づけられてしまっていたのではないだろうか。たしかに、一種の反射反応のような型になってしまっていたのに違いない。それでは何にもならない。
「どうでしょう？」　「いけないの」
栗山氏の時間に、この問答を、しかも見当はずれの問答を聞かされ、深く反省させられた。それ以来私はこんな風に考える。
一人ひとりの先生には各々小さな癖、その癖自体は、とりたてて問題にするほどのものでもない、ちょっとした指導方法の癖が幾つかあるのではないかしら　と。そしてその癖が先生自身予想もしていないような結果を、どこかで生んでいるのではないかしら、と。
だからと云って、先生　一人ひとりが、癖のない完全な人間、教育者でなければならないとも、神経質に注意していなければならないとも考えないが、常に、自分自身の指導方法と、それの生む　さまざまな結果を注意深くみつめていなければならないと、深く考える。
（井草幼稚園）

園長にのぞむもの

私は国立大学付属幼稚園の教諭です。十二年間勤続の間に三代の園長先生につかえました。「園長に望むもの」といわれましても、私はちょっととまどうのです。そのものずばりと出てきません。今の園長先生に教諭の立場として、こうあって欲しいと思うもの、それはいろいろあるでしょうが望んでみたところで、現在の制度上ではどうにもならないことです。そこでそれ以前の問題にふれてみたいと思います。

私も若い頃はよく若輩が寄ると園長や主任の先生の悪口をいったり、理想をしゃべっては自分を慰めたり、新しい活力を得たような記憶を持っています。しかし現在ではそれ程単純に考えないようになりました。それもそのはずです。自分が悪口をいわれる立場になりましたから、むしろ園長先生に同情して同じ立場で物を考えるようになりました。

十二年間の付属幼稚園生活を通して感じとった、

「園長はこうあってほしい。」と思う理想論とでも申しましょうか、特に付属幼稚園長を付属教官としての立場から考えてみますと、

一、専任園長であること。

国立の付属幼稚園長は大学の教授が併任するようになっているようです。これは付属学校の使命達成の上から、非常によいことだと思います。ただし、当園の場合は付幼・小・中・校長兼務になっています。全国を見渡した場合もこういう所が多いようです。

園長、校長の職務規定があって、本当にそれに忠実であるためには、三つの種類の異った学校の長を兼ねるということは到底考えられません。このような現状を進めてゆくことは最も抵抗の弱い幼稚園にしわよせがくる結果となり、ひいては幼稚園教育の推進をはばむものとなります。今問題になっている管理職手当でも出るようになれば財政的にも影響をしてきます。けれども、園長手当も何も無い現状では専任、兼任の別は財政的には何の影響も無いと思います。

二、子どもに出来るだけ接触の機会を作っていただきたい。

これは、むしろ私の方に責任があるかもしれませんが、年に、二、三回の式にお話をしていただくだけでも子どもは非常に園長先生を歓迎します。三回が五回になり、五回が七回になるだけでも、園長先生と子どもたちの人間関係はすばらしく発展するだろうと思います。

三、先生たちと出来るだけ接触の機会を作っていただきたい。

これも私の方に大分責任があるように思いますが、現状では、私がのっぴきならぬ用件の相談や報告を持って何回か足を運んでやっと話し合いの出来るのが週に二、三回ぐらいとすると他の先生たちは月に一回ぐらいしか無いでしょうか。接触を重ねることによって心が通うような気がいたします。三人の園長先生がそれぞれ専門の学問を背景にした教育的識見を持っておられます。それが、一人ひとりの教師の教育観とか児童観の上に反映してゆくためには、どうしても個々の教師を指導していただけるような機会をたびたび持つことが必要だと思います。

教師の腰が浮いていては本当の教育は出来ません。いろいろな使命を持った付属幼稚園の教師がじゅうぶんな教育効果をあげるために、園長先生が積極的に一人ひとりの教師に接触の機会を作っていただきたいと思うわけです。

幼稚園参観記

橋一つへだてて東京と接するここK市の一隅に、うらやましいほどひろびろとした学園がある。その南の門をくぐり、目指す幼稚園にと足を運べば、子どもたちはちょうど自由遊びの最中である。規模の小さい東京の幼稚園ばかりみてきた私たちの眼には、すべてがいかにも広く、のびのびと感じられてならない。

園長の話によれば、「ここの園舎の建坪は、上下あわせて四百坪であるが、二階は掃除と管理がいきとどかず、一階の二百坪だけを使用している。しかし、もともと軍需工場の古い建物を買いうけたものであるから、水道その他保育室として改築するにはかなり無理があり、三年後には新築することになっている」とのことであった。そして、同じ敷地の中に幼・小・中・高・短大と棟をならべているので、大きい感じはするが、この中で安心して園児を遊ばせることの出来る庭の広さは、約三百坪だとのことであった。なるほどよく見れば、軍需工場から保育室にきりかえるために床を二重にしてあり、また窓ガラスをとりかえたりして、随分苦心をはらっているようであった。

次に園児についてみると、創立当時は農家の子どもが多かったが、現在では約七割が、勤人の子どもとなっている。年長四クラス、年少二クラス、合計二百四十五人がここに通園しているが、この地域は、年々一年保育児の数が増し、二年保育児の数が減少しているので、その組分けはなかなか容易ではない。年少組の中には三歳という子どもも二、三人はまじるし、時には五歳児の四月生れの子どもを、四歳児の中に入れたりもしなければならない。また、四歳児の組で年令差をさけられない場合には、机を別にしてやってみたりする。このように、この問題は現在この園にとって最大の悩みとなっているのである。

こういうわけであるから、四月ともなれば、カリキュラムをたてるのに先生がたは無我夢中である。大体月はじめに、年長組と年少組で打合せをしてカリキュラムを考え合うのであるが、一学期は、二年保育はここまではやる、一年保育は出来る範囲という線で進む。二学期になると、このような心がまえははずされる。

そして、やってみたときの経過や、反省については、自由に話し合う。先生がたは子どもたちを送り出すと、よほどのことのない限り、必ず顔を合せて、今日あったことを話し合うのが習慣になっている。そし

て、そのことのために時には事務的な仕事がはかどらないということも当然ありうるので、そこは各自お互に自覚して処理の対策をわきまえているから、別に問題はない。こんなふうであるので、どの組のことについても大体のことがわかっているから、たいへん心強いのである。

今日は、年少組のある組では、自由遊びのあと紙芝居の製作にとりかかった。「赤頭巾」の紙芝居が破れていたので、これを機会に子どもたちが紙芝居を作るようにと考えて、計画したものである。まず、子どもたちに話をさせる。子どもの話しかたはまだまだ少ないので、先生があとを上手にひきとっては、赤頭巾のお話にもっていく。そのあとめいめい画用紙に話の場面をえがく。子どもそれぞれの興味を第一におき、同じ場面を二、三人ずつが与えられた。あとでこの二、三人が大きな紙に合作で一つの場面をつくり、その絵をみながら子どもなりに話すことがねらいになっている。この子どもたちは語彙が少なく、簡単な発表すらなかなか出来ないので、紙芝居の製作を通して、そういう才能をのばしたいという意図からである。

年長の中でも年の少ない方の組では、今日は動物を画用紙でつくっていた。この組の子どもたちは、好きなものを画かせたいと思っても、「かけない」と云う。また画いたものはなぐりがきが多いし、四、五人を除いては、兎と亀の絵を画くのが大部分である。この頃、自分で考えるようにはなったが、表現力に乏しいという欠点をもっている。だから何とかこれをのばさせるように、というのがこの先生の苦心するところである。

この組の子どもたちは、最近「お家ごっこ」に興味をもち、その家では、犬や猫が番をしている。それで先生は、動物を画いたり作ったりさせることによって、表現力をのばす助けにもし、またこれをもう少し大がかりな遊びに発展させたら——と思いついた。

だがこの付近では、都会の真中の子どもとちがって見聞の機会が少ないので、材料が乏しい。いろいろな動物の姿、表情なども、なんとかしてとらえることが必要である。動物の玩具は、もちろん豊かに与えられているし、それぞれ子どもたちが知っている動物もある。だがもっと種類があればなおよいのである。それでたくさんの動物の絵本が用意された。まず画用紙に絵をかき、色をぬる。ハサミを使って切りとり、ノリではりつけて製作は出来上る。その間の操作をみていると、絵本の絵をみて作る子どもが多い。絵本を準備したからといって、絵本の動物を作らせようとしたわけではないが、とにかく、こういうものがあれば、それをみて作ることが出来る子どもたちなのである。見ながらでなければ画いたり作ったり出来ないという子どもの創造力、表現力をのばすためには、出来るだけ多くの、目にふれる機会を作ることが大切だという

ことを示しているのではないだろうか。

また、四五歳児のまじったクラスでは、粘土細工をしていた。昨日写生の材料に使った果物が、まだ色あせないであるので、今日は粘土で作ってみようというのである。この学園の敷地は、粘土を掘り出すことができる。園内で粘土を掘って、それを早速このような活動に利用できるのである。ゴム粘土を買って使う幼稚園が多い中で、掘り出す作業から始めることが出来るとは、何とよいことであろう。指導をする先生はたいへんであろうけれど、自分たちの手で得た天然の材料を、自由に使うことが出来るとは、何とめぐまれたことであろう。この日、粘土細工の目的は、眼の前にある果物であった。観察に主眼がおかれたためであるが、もっと他の創作にも自由に発展させることが出来たならば、なおよいと思われた。

またある組のことである。山茶花の咲く季節となったが、中にはこの花をしらない子どももいる。そこで「さざんかの歌」をうたうばかりでなく、先生と子どもたちは山茶花をみに庭におりていった。一つ一つ、ただそれだけを別々に教えるのでなく、先生がよく考えながらお互に関聯させるべく誘導していくところは、たいへんよいことであると思う。そのあとのリズム遊びもなかなか楽しそうであった。

さてここに来る子どもたちは、概して背丈があっても体重が少ない傾向がある。そのためこの園では何よりも健康に注意しているとのことであった。例えば、小学校入学がとても無理だと思われるような子どもがいれば、すぐ医者に相談する。その結果、一年延期するような思いきったことも時にはやる。そして小学校二、三年ぐらいまでは、幼稚園の組分けを考慮に入れてもらっている。こういうことは、同じ一つの学園でお互に連結していることのよい点でもあろう。

再びこの園の設備の問題にもどると、最近ここではテレビを買った。このような文明の恩恵には、まだまだあずかれない子どもがいるので、ある一室をテレビ室に変え、みせるようにした。子どもたちは、曜日と番組をよく覚えていて、楽しみにしている。目下のところまだ見させることのみに終っているが、将来はこれをすすんで教材に利用できるようになるであろう。そして、もっとそのあつかいかたにも工夫が加えられていくことであろう。

またこの学園には、小学校低学年と、幼稚園児のために、スクールバスがある。当番の先生がきめられ、方向によって順に送りとどけられることになっている。現在これを利用しているものは、四十七名ほどである。このバス料金は、一ケ月普通七十円、最も遠方で通園に三十五分ほどかかる子どもは、百五十円だとのことである。話はそれるが、ここでは毎月八百円の保育料と、五十円の材料費、百円のＰＴＡ会費を徴収している。法人の幼稚園であるが、この県下で

は、とくに法人だからといって補助金が特別に出されるわけでなく、県内全幼稚園ともどうようにあつかわれているのである。

とにかくここの幼稚園は、必要なものは何でも整えられている。経営者と園長とが分立しているから、そのようにどしどし出来るのかもしれない。いずれにしても、じゅうぶんな場所と、沢山の遊具があたえられていることは、たいへん恵まれているといわなければならない。建物の外観こそ悪くとも、設備がいきとどき、一般に比すれば不自由がないので、子どもたちはのびのびとおおらかに育っているのである。

やがてこの建物も改築され、もっと近代的に合理化された理想的な幼稚園として、生れかわることになるであろう。園長先生はじめ先生がたは、どうしたら最も子どもたちのためによい設計ができるか、方ぼうの幼稚園を観させていただいているとのことである。しかし、もしも経費のことにばかり気をとられて、新しく建てた園舎が、狭いものになってしまうならば、この廊下をはさんだ南側の保育室、北側の遊ぎ室、テレビ室、あそびに使える広い部屋、観察室などのある、ちょうど広さから云えば、一組が二部屋も使っている一見粗末なこの建物の方が、余程よかったということにもなりかねない、などと、つまらぬ取越苦労もしてみたりした。

まとまりもなくのべたが、以上がこの幼稚園の概観である。広い土地と、ゆたかな遊具、ここに遊ぶ子どもたちは、本当にしあわせそうであった。そして園長さんの話によれば、「先生がたが、本当に自分の仕事として、やっていらっしゃるということが、大いに子どたちにプラスになっている」とのことであった。

フレーベル館社屋移転御案内

新（東京都千代田区神田小川町三ノ一）
旧（東京都千代田区神田小川町二ノ五）

右のように新たに社屋を新築移転いたしましたので御通知申し上げます。

幼児の教育　第五十七巻　第三号

三月号©　定価　五〇円

昭和三十三年二月二十五日印刷
昭和三十三年三月　一　日発行

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学付属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五番地
印刷所　凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌ご購読についてのご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

幼児の劇あそび集

本劇あそび集は、二十四篇あり、みな本研究会員が研究脚本化したもので付属幼稚園児に実施して非常に喜ばれたものばかりです。

○幼児たちのよろこぶ童話の中から…浦島太郎・舌切雀
○幼児のあそびの中から……幼稚園ごっこ・動物園
○自然や社会環境の中から……花の子ども・おやすみなさい・ひよこのさんぽ
○体育的なあそびを意図してつくったもの……仲よし
○行事をとりいれたもの…クリスマス・おひなさま

三才児に適したもの、四才児向きのもの、年長によいものなど学期ごとにそれぞれ数篇ずつとり合せてあります。
またあまりに専門的にならず、ほどよいしろうとの味をもっております。

（四六判　二一〇頁　頒価二五〇円　送料三六円）

申込先き
東京都文京区大塚町お茶の水女子大学付属幼稚園内
幼児教育研究会

改訂 幼児の教育内容とその指導

お茶の水女子大学附属幼稚園・幼児教育研究会 編

＊園での**幼児**の生活に、どんな**内容**をもりこむか。
＊その幼児にどのような**指導**をしたらよいか。
＊このような**初版本編纂意図**の上に、実践遂行の上で、さらに、掘りさげ、**増補・改訂**されたのが、本書です。

上製本　A5判352頁　定価320円

フレーベル館発行

古い歴史と新しい編集の観察絵本

キンダーブック

＝第13集　第1編　4月号予告＝

☆お子さま方の感情と知識を
豊かに育てる絵本☆

A4判・16頁
毎月付録付
定価四十五円

《四月号内容予告》

☆はるがきた　はるが　きた
絵・吉沢廉三郎先生

☆にゅうえん　おめでとう
絵・岩崎ちひろ先生

☆ひっぱりっこ
絵・林　義雄先生
詩・与田　準一先生

☆やまの　ようちえん
絵・武井　武雄先生
絵・初山　滋先生
歌・清水かつら先生

☆くつがなる
絵・河目　悌二先生

☆ものれーる
絵・鈴木　寿雄先生
文・小林　純一先生

☆さんびきの　こぶた
絵・文・富永秀夫先生

☆おやまのころちゃん　まちへいく
絵・安　泰先生
文・三越左千夫先生

☆にるすの　ぼうけん
絵・文・武井武雄先生

別冊付録「つばめのおうち」
特別付録「そんごくう」
工作付録「きんだーばす」

東京都千代田区　株式
神田小川町 3の1　会社
フレーベル館
電話東京（29）7781～5
振替口座東京 19640 番